

とある転生者の試練 《改訂版》

雷灯かがり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男の名は沖田総生。戦乱に生きる者として刀と銃を頼りに戦ってきた彼は、帰宅途中に突然の死を遂げてしまう。不覚を取ったと悔やみ、絶対に有り得ないと考えつつも復活を祈る。そうして永久の微睡みに落ちるのだろうと絶望し放心した彼だが、その推測は裏切られ、白光流れる黄金色の空間に導かれる。そこで自称神様に選択を迫られた彼は、ある決断を下し、見知っていた異世界に身を投じることとなるのだった――。

※順にf a t e / s t a y n i g h t、とある魔術の禁書目録・とある科学の超電磁砲、ソードアートオンラインの順番で異世界転生します。

※オリ主以外に必ず二人以内、それぞれの異世界にオリキャラが登場します。

※原作f a t e / n a n o d e、他の世界にf a t e時空の設定を使うことがありません。

※この作品では、たびたびオリジナル設定が出ることもあります。

※以上の点に不快感を抱いた方には、ブラウザバックをお勧めします。

目次

プロローグ	1	
第一章 fate / stay night 編		
——十年前冬、第四次直前	城下の誓い	23
——十年前冬、第四次前後	旅立ちの刻	33
——九年前秋、冬木市到着	地獄を越ゆ	44
——九年前秋、言峰教会内	弟子入り!	53
——五年前春、入学式前日	鋼の信仰心	60
——五年前春、入学式当日	イレギュラーズ	72
——幕間	間桐家の人々	85
第一章 とある編		
第1話	わたしの識らなかった世界	100
第2話	わたしは夕食を食べたかった	109
第3話	わたしと私	116

プロローグ

——夢を見ている。

無数の命が露と散った丘。地には継ぎ接ぎだらけの衣服のような死体が、どきりと埋めつくし。曇天の空は鉛のように重くて、真つ逆さまに落ちてきてしまいそう。空気に血が混じったのではなくて、血に空気が混じったのだと錯覚しそうなほど、重く肩にのしかかってくる血霧。その総てがオレを呪い殺さんとしているように、あのとときの己は感じた。

それが始まりだった。

あのととき以来、オレは武器を持つことを頑なに拒んだが、国はそれを決して許してくれなかった。国を救った「英雄」の象徴として祭り上げられたオレは、何度も何度も何度も何度も幾度となく戦場に赴かされた。自決を考えたこともあったが、守るべき者がいたから、どうしても実行に移せなかった。

やがて、長きに渡る戦いの日々に終りがきた。

一年前のことだ。争っていた各国は停戦条約を結び、つかの間の平和を得た。オレも他の人々と同じように帰郷し、離ればなれになっていた家族や友と共に、無事帰ったことへの喜びを分かちあった。しばらく掴み取った日常を謳歌していたオレたちだったが、そんな日々は長く続かないと、肌では感じとっていた。

その予感はずだった。

ある昼下がりの夜、国に喚ばれたのだ。専属の傭兵にならないかとの話だった。カネは弾むし、お前にぴったりの仕事だと言われた。

援助を受けて万全の態勢で戦いに臨めるだろうとも言われた。その期待には応えなかった。もう二度と人を殺したくなかったし、普通の高校生としての自分を気に入っていたからだ。

それから、じきに三日経つ。

国からの音沙汰が無いということは、このまま見過ごして貰えるのだろう。かりにもオレは英雄と呼ばれた身だし、なら殺しにくることはないなど楽観している。国はオレに手を出さないと言ってくれたのだし。無論、裏切られる可能性はある。人を信じた結果、裏切られて罠に陥れられた経験は数多あるし、それで命の危機に瀕したことも両手の指の数では数え切れないほどあるのだ。

……が、信じることは止めない。

誰かに狙われていないかと、常に気を張りつめているのはかなりの精神力を要する。もつともここが敵地や戦場なら話は別だが、家や学校などの本来は平穏な場所で四六時中奇襲を考えるのは勘弁だ。おちおち、ふかふかの布団で熟睡することもできやしない。だったら疑うよりも信じたほうが気が楽だし、心も痛まない。

総てを生かす。

戦場でそれをできた試しがない。当然だ、そんなコトを言っていたら自分の命など瞬く間に失ってしまう。だからせめて、守ると決めた仲間、そいつらだけは最後まで、守りきって――

☆—☆—☆

「――」

目が覚めた。

むくりと起き上がり、今夜中に充電完了したスマートフォンを起動させる。

「6時半。いつも通りの時間だな」

ぼそりと呟き、かるく腕を伸ばすストレッチで二度寝のあくまを退散させる。が、これだけの運動では睡魔を追い払うには不十分。洗面所で顔に冷水を浴びせることで、ようやく退魔が遂行されるのだ。適度な反発性の枕と、雲のように柔らかい布団の誘惑をはね除けて、学校の制服に着替え廊下に出た。

「ふわあ……」。相変わらず広い家だ、もう二人しかないのに」

そう思ってしまう最大の理由は、オレの部屋が最も離れの隅っこにあるせいなのだが、この屋敷がやけに広くて複雑なのがそもその元凶だ。なんでもご先祖さまが遊び心で改築に次ぐ改築を繰り返した結果、初見の人だと頭がおかしくなるような造りになってしまったんだとか。どんなにトチ狂った構造をしているか、それを物語る例には事欠かない。例えば、友達を招待するときには、常に行動を共にするか、それとも押すと大音量で位置を報せてくれるボタンを渡すかしていたり（どちらにせよ悲鳴は上がったが）。例えば、ご近所さんからは幽霊屋敷だのカラクリ屋敷だのと畏怖されて、ひどい災害があったときも、受け入れ準備は出来ていたのに誰も来てくれなかったり（実際、庭には踏む足場がほとんど無いほど罨が満載なのでそれはそれで正しい判断なのだが）。例えば、地下にシエルターや迷宮、果ては冥界まであったり（とはいえ流石に冥界は眉唾物だが、たまに幽霊に遭遇することもあるのでひよっとしたらあるのかもしれない）。

――と、ちよつと思いいただけでもこんななのだ。ご先祖さまの洗練された遊び心に満ち溢れた思考回路も分からなくはな

いが、至るところに点在する罨を毎日避けて生活する子孫の苦勞を慮つて欲しかった。尤も文字通り全てを自称前衛的建築に一生を捧げた彼らにとつて、そんな心遣いは不要に等しく、むしろその道を妨げる障害にしか成り得ないだろうけども。

三階からの螺旋階段を滑り降りたらあつという間に地上一階。また長い廊下がお出迎えするが、幸い洗面所は手前から数えて二番目の部屋で、その次にダイニングルーム。これが隠し部屋だと手間だったが、ご先祖さまは食事を優先するべきと考えてくれたのだろう。

ちなみに最優先は武器庫。刀や弓、槍など近代兵器以外が主だ。銃とか、そういう近代兵器がある部屋は一番目の部屋から直通の隠し井戸から行ける。そこは常識的に隠し階段だろと思うのだが、とあるご先祖さまが『つまらない』とバツサリ斬つたらしい。曰く、容易に建てられない設計で驚かすのが好きだったらしく、この家が迷宮っぽくなつたのも、先々代の当主たる彼の仕業が5割くらい原因と伝えられている。

そしてしばらくすると、ダイニングルームによく到着した。「ふむふむ。白米、アサリのみそ汁、肉じゃがに青菜のおひたしか。オーソドックスな朝食だな」

「……………おい、納豆を無視するな。重要なタンパク源にして安価という奇跡の一品としか言いようがない食品なのだからな」

——などと、電子レンジで暖めなおしたばかりのアツアツの肉じゃがが入った大皿を調理場から持ってきながら納豆の弁護を始めた奇人は我が姉である。筋金入った和食派であり、特技が早寝早起き朝戦闘な純日本人だ。

まあ兎に角、その特技が示すようにうちの姉は朝すこぶる機嫌が悪い。どんなに嫌いな食物でも、文句一つ言おうものなら竹刀を渡されるので、仕方なく諦め我慢して食べる他ないのが現状である。

けどやられっぱなしってのは性に合わないし、最も苦手なヤツを無理矢理食べさせられるんだから、愚痴くらいは言ってしまうとマイハートが叫んだ。そう、叫んでしまった。オレはそれに逆らわなかつ

た。

「…………まー、残念ながら納豆は体にいいよな。このネバネバしてて匂いが強烈なやつがそうだって知ったときは世も末だと——
——って姉上?」

様子が変だ。

ガキン、と姉様だけでなく空気が固まったような気がする。急速冷凍されていく団欒の雰囲気。気のせいと信じたいが、冷気だけでなく靈気も濃くなっているような気が。相変わらずの沸点の低さだが、今日のはいくらなんでもひどい。これ以外にも何か気に障ることがあつたか?

「喜べ愚弟。そんな好き嫌いの多いお前には、これから毎食納豆を付けてやろうではないか」

「…………冗談ですよ、ね?」

「これも一種の修行だ。苦手なものを克服する過程で、精神力をより一層高めるといふな」

有無も言わせぬ暴君の一声によって、今後のオレの運命は確定した。

食事当番は交代制で、各自好きなようにメニューを決められるのだが、悲しいかな、オニの決定にオレは逆らうことなど本能的にできぬ。

「そら、食べた食べた。早急に片付けて日課の模擬戦をせねばならぬのだからな」

「へいへい、いただきやすつと」

時計は7時を指している。

8時には此処を出ないと間に合わないから、姉の言うとおり、さっさと朝餉を済ませてしまおう。

——まとめて肉じゃがと米をかきこみ、みそ汁を飲みほし、最後のおひたしだけはゆっくりと良く噛んで食べる。
目前^納に迫る脅威^豆を思い出したためだ。

そうやって長々と噛んでいると、朝で不機嫌な姉の堪忍袋の緒が切れたのか、木刀が音速もかくやというスピードで降り下ろされる!

むろん、みすみす面を取られる俺ではない。常に手元に置いてある刀——大和守安定を納刀したままの鞘で無造作に斬撃を防いだ。

「うちは奇襲攻撃がお家芸だけどき。肉親に向かってそれをやるのはどうかと。ほらもつと、そう正々堂々と打ち込んでくれない？」

「だが問題ない。現にお前はそれを、完璧に阻止できたのだから」

そうだろうと同意を求めるマイシスター。

その表情は涼しげであるが、眼が笑っていないことと迫り合いを続行していることから判るように、内心は悔しいらしい。

「ふん、まあいい。この続きは道場でやるとしよう」

大層悔しげな眼で刀を収める我が姉。

ああ、確かにあれは完璧な奇襲だった。五年前の俺だったら反応すら追いつけない、音速越えの抜刀術。

「わかった、すぐ行く」

オニは剣道場へと足早で過ぎ去った。

オレも自動食器洗い器にテーブルのを放り込むとすぐに走って姉の跡を追った。問題の納豆はパック詰めのもだったため、学校カバンにしまっってしまったえば一時の隠蔽は可能だ。そのまま学校に持っていくって、昼飯時にダチにプレゼントと称して押し付けよう——

——突然話は移ろい変わるものだが、この家で道場といえは三つある。

地上には剣道場と弓道場。地下には秘匿された射撃場がある。

前者二つは誰でも使えるが、後者は違う。家訓によれば、この家の者かつ、一定の年齢に達していなければ特例を除いて使用不可なのだ。

「ま、うちじゃ特例ってのは先祖代々まったく機能してないものを指すんだがね」

1 条曰く当代当主が許可すればオールオッケー。

3 才児だろうが手配書に載ってそうな怪しげな人相だろうが、全てはその代の当主の裁量次第だ。

それだけ聞くと、特例が出ることは稀と考えることもできようが、しかしウチの家訓にはこんなものがある。

“常に余裕を持たず破天荒であれ”

“蔓延る悪法破つてよし。むしろ進んで破れ”

“特例は出すためにある。武器は何かを守るためにある。己は何のためにある？”

2番目の悪法はイコール家訓とも解釈できるし、3番目の家訓っぽくない家訓の最初の文は言わずもがな。家訓がこんなだから本来怠け者でいいはずの特例は働き者になったのでしたとき、めでたしめでたし。

——なんて、目線を下に落としながらくだらない事を考えていると、どういうわけか廊下特有の木目模様が石畳に姿を変えていた。

どうやら思考に埋没していたために、道場に着いたことにも気付かなかつたらしい。障子を開けた音で現実に意識が帰ってきたのだろう。

道場のひんやりとした空気が、肉体に精神を固定させる。冬だから寒いのは当たり前だが、道場のと外のとではその性質が異なる感じがする。

なんとというか、ここのそれは身体の芯そのものとなって邪心を打ち消し、剣だけに専心させるような効果があるのだ。

——靴を脱ぎ、一段上がる。

神棚に向かって一礼し、それとは別の棚にある防具をちやつちやと着る。身内だからといって手加減しないようにするためだ。

その後、竹刀を取りに奥の部屋に行こうと思っただけでも、視界の隅に師匠がそれをこちらに投げようとしているさまが映ったので、慌てて止めに行った。

すると、連日機嫌を悪くするようなことが続いたせいでお冠なのか、ふだん滅多に叫ばない姉にしては珍しく「遅い！」と叫んだ。

激怒されてはマズイためしづぶ平謝りしようとしたが、それだけだとやっぱり物足りないもので、僅かばかりの反撃を交えつつも誠意を込めて詫びることにした。

「次回から気を付ける。それはそれとして、本気じゃなくても竹刀を投げようとするのはどうかと思うのだが」

「気が立ってつい、な。そんなことより、早く始めないか。お前がのろのろしていたせいで、30分とできん」

「…………許されたようだが、油断はならない。」

構えを維持したまま摺り足で持ち場まで歩く。

むろん後ろ歩きで。背中を向けたら、次の瞬間斬られることを体で知っている。

なお構え方は防御力を重視した上段霞の構え。一定の距離を取るまで戦わない、どこを打つても突いても勝ち、が試合のルールだが、我が姉のコトだからそんなの関係ねえとばかりに不意打ちされる危険性は捨て切れない。この構えは、たとえそうされた場合でも、凌いで突き返すことを目標とした対卑劣姉カウンター戦法である。

「……………」
対するは平正眼。

何代も前より伝えられる由緒正しい構え。嫉妬なんてしていないが、姉はまだ衰弱しきってなかった頃の先代から姉はじかに教えを受けて滅法強くなれたという。じつに羨しい。

…………そんなことはさておき。

オレはカウンターが得意だ。むこうから仕掛けてきたならば返す刃で反撃、その場合の勝率は八割を超える。

姉は速攻の突きと降り下ろしが得意だ。一瞬でも無意識に隙を見せれば、どちらかで、一本が必ず決まる。まさに必至の一撃と云えよう。

オレにとつての必勝法は、とにかく待つこと。相手から打ち込んできたら勝ち、こちらから攻め込んだら大抵負ける。

やつにとつての必勝法は、文字通り隙を突くこと。瞬きをしていたら勝負が決まっていた、なんてことはザラなのだ。

「来ないのなら、私から行くが？」

挑発に乗ってはいけない。

いけないのだが、如何せん時間がない。このままでは、駆け引きの応酬だけで終わってしまう。

そんな中途半端な終わりかたよりも、死ぬわけじゃないんだし、いつそのこと特攻して勝ち負けを決めるほうが面白い。……いや、その前に一石二鳥を狙ってみるか。冷静さを欠いている今なら、エサに簡単に飛び付いてくれるはずだ。

眼を瞑る。

精神と肉体がうまく合致した刹那。カッと眼を見開き、面を狙った姉の上段からの降り下ろしを、下から弾いて防ぐ。

「ちっ——！」

姉の舌打ち。

視覚を放棄するという、分かりきった罠に見事引つ掛かってくれた。冷静じゃない。いつもの姉なら、むぎむぎオレの必勝パターンに持ち込ませてくれやしない。

重心を下に落とし、ほぼ同時に胴を突く。

体勢を整える時間なんて与えない。この突きを回避できるのは、神速の敏捷性を持っているヤツか、時間を操れるような能力を持つ者だけ。

オレは今までそう考えていたが、ひよつとしたら姉によつて人間でもできる第3の方法が開発されたのかもしれない。だとすれば、誘いに乗った行動にも説明がつく。

必勝が必勝でなくなるのは残念だが、それ以上に、どんな手段で破ってくるのか、期待に胸を膨らませるような気持ちが勝った。

「——！！」

スローモーションで撮影された動画を視ているようだ。自然に胴の中心へと竹刀が吸い込まれてゆき——、

「えっ?」

バシンと音がした。

胴に竹刀が当たった音だ。まさか姉は、何の策も持っていなかったにもかからわず打ち込んでしまったとでも言うつもりか。失望を隠しきれないオレに、どういうワケか今度こそ面打ちが入った。

「……………へっ?」

「私の勝ちだな」

そう吐き捨てるように呟いて、竹刀を片付けに奥の部屋へ向かう姉。あの面打ちをほんとうに心の底から不思議に思ったので、奥から戻ってきたアネに訊いた。

「勝ちって、なんでさ」

「勝ちも勝ちだ。さっきの試合にのみに限って、正式な大会のルールを採用した。それによると、胴突きは反則ではないが有効でもない」
横暴である。

胴突きが無効なのは私に不利だと言ってオリジナルの規則を設けたのに、自分がそれで負けたとなったら勝手に変えてしまうなんて。

本人も理屈がおかしいことは承知しているのか眼すら合わせずに、まるでお気に入りのオモチャを無くしてしまった子供のような雰囲気で剣道場を出ていった。

「あれ、そういや姉ちゃん、面と小手以外の防具は着たままだったような……………」

——ま、いいか。

普段なら今からでも急いで追い付いて伝えに行くところだが、今日はイヤな目にもあったし因果応報ということだ。

……………そしてその後、我が姉はその格好に気付かずに職場に到着して大恥をかく羽目になったとか。モワツとするのが不愉快だから試合後すぐに面と小手を取ってしまったのが今回の敗因、取ってなければ違和感を察知できたものを、などと当人は供述し、オレは胴や垂れに違和感はないのかとツツコミを入れるのだが、それはまだ、遠い、遠い、ずっと後の話。

——防具を片して、カバンを手に取る。

そして、誰も居なくなった屋敷の入口を施錠する。

この邸の構造は和洋折衷をテーマにしているが、ここは和風っぽい作りだ。木製の門とか、現代じゃほとんど残っていないレアケース

ではなからうか。

「……………いつてきますっ」と

相手はいないが、習慣で挨拶。

こういうのは気持ちの問題だ。おはようと言えば朝になった気分になり、いつてきますと言えばこれから外出するんだなあと改めて感じる。そんな何気ない事が、意外に重要だったりするものだ。

腕の時計をじっと見ると、ホームルームまであと五分だった。家から学校まではわずか一分で着いてしまったため、今日も余裕を持って登校できる。

学校は十分前登校を推奨しているから本当はもつと早くに行くべきなのだろうが、今の時間帯が最も人が多いので仕方がない。それに万が一のことを考えると、周りに少しでも多くの人壁のあるほうが安全なのだ。

腐ってもこの身は英雄。各国が休戦協定を結んでいるとはいえ、オレの暗殺を目論む人間がいる可能性は低いとは断言しえない。大量破壊兵器でオレともどもここら一帯を焼け野原にすれば確実に殺れるが、一年の間それをしないと云うことは、現実的にできない理由が必ずある。人道的なものか、あるいはリスクがリターンに見合わないのか。新たな勢力の出現に脅威を感じて協定を成立させたとの噂もあるし、それまで“沖田総生”を生かしておきたいのかもしれない。

……………正直、自分にそこまでの価値があるか疑問だけれども。むしろ、忘れさられているか無価値と判断された確率が最も高いと思う。

「ああ。そうだと、いいんだがなあ」

戦果だけは上げてしまっている。

どれを取っても凡人の域を出ないオレが、どうしてあんなことを成し遂げてしまったのか。世界七不思議の末席に加えさせてもらいたい。

そんなことを——自殺でもしそうな沈鬱げな雰囲気で、敢えてそれを誰とは言わないが——考えていた誰かだったが、横ばいから

会話が聞こえてきたので、一時的に思考を中断して、趣味は悪いが盗み聞きに没頭することにした。

「最近さ、あの話聞かなくなったと思わない？」

「あの話って？」

「ほら、あれよ。この辺りに現れる連続殺人鬼」

「捕まったんじゃない？ 警察がこの前、厳戒体制を敷いたって聞いたことがあるけど……」

「そうかなあ……。あ、それとは——」

……………ふむ。謎の連続殺人鬼とな？

通りすがりの女子高生の噂話としては物騒な話題だな。そいつは姉貴によれば半年前に活動を止めたらしいが、捕まった話は聞いていない。やり口は深夜に鋭い切れ味をもつ長物で首ちよんぱ。それは鮮やかな切り口だったという。

———そういえば、あの事件は時期的にオレが刀を抱いて寝なくなったときに重なる。けれどもオレは夢遊病になったことはないらしいし、違うだろう。

それからすぐに、学校に着いた。

腕時計を確認すると、始業時間はもうすぐだった。道理で焦って走る人が多いわけである。オレも彼らのあとを追うように校庭を走り抜け、二階まで階段を駆け上がり、そこから一番近くで賑やかな教室に入った。

クラスは2年A組。物静かで真面目な人が大多数だが、盛り上げ役やムードメーカーもいたり、わけわかんないコトをいきなり叫んだりする類人猿もいる。

席は廊下側。あまり深く考えたくないが、何度も席替えをしているのに一度も窓際にならなかつたのは単なる偶然と考えていいのか。「では、ホームルームを始める。日直、号令を」

先生の合図で、一日の学校生活は始まる。

チャイムはない。なんでも生徒の自主性を育むためだとか。い

まの時間が何時か見て、その時々合った行動をその人自身の判断でできるようになれば、その技能が将来に役立つらしい。

そんな学校の方針はさておき、この学校には空いている席が幾つかある。あの殺人鬼の被害者の席と、とある人の席だ。

前者は例外なく天国か地獄に送られ誰一人として還つてきてはいないが、後者の彼女は病院で死亡が確認されてから、なんと丸一日も経って蘇生したらしい。

しかし、そんな超人でも一度死んだ影響は大きかったためにリハビリで休学することになったのだとか。

そんな常人にあるまじき体験をした彼女だが、どういうワケかオレのことが好きらしい。

“私を最後まで守ってくれてありがとう”

病室に呼ばれたときに、抱きつかれながらにそう言われたが、奇妙なことに彼女とは単なるクラスメイト以上の関わりは無いのだ。戸惑うオレは眉をひそめて、他の誰かと勘違いしているのだろうかと言ったら、違うと言いつ返された。わけがわからない。

——が、こればかりは自身の問題だから放置はできない。わけがわからないなりに推測だけは建ててみたのだが、あまりにも荒唐無稽に過ぎるものなんで却下。死んでるときにオレと出会ったなんて、そんなコトあるはずない。あつたとしたら、それは、時間軸のズレの説明がつかないのだけれど、いつか——

「——きた。!!おきた。にやけてないで、立つんだ沖田! 沖田総生いいいいいい!!!」

「えっ、あ、はい、すみません!」

慌てて立つ。

すると、周囲からくすくすと笑い声。視線は生暖かいものと殺気だったものに大別される。

どうしてこのクラスの人はみな察しがいい。

あいつの席に視線を向けて考え込んでいただけでそんな反応をするなんて、いったいこやつらは何者なのか。

「気をつけ、礼！」

委員長が号令するやいなや、早足で廊下に出る。

なんとも居たたまれない空気に成りかけていたからだ。背後から、きやつきやつと黄色い声や、リア充爆発四散しろ、みたいな怨念染みた声が聞こえてくる。

なぜだ。返事はしてないし、そのため付き合ってもいないのに、どうしてこうなった。誤情報が拡散でもしたのか。

……こうして今日も、授業が始まる直前になるまで屋上に退避することになったのだった。

——学校は終わった。

下校時間になると教室にはほとんど人がいなくなるので、一人になりたいときには遠慮なく使わせてもらう。ポケットからスマホを取り出して電話を掛ける。

プルプルプルと、何回か振動したあと。

「もし、沖田だ」

「今夜、7時くらいに行こうと思うんだが」

「じゃあ、話はそのときに」

「いつでも、待ってるから——」

電源ボタンを押して、通話を終了させた。

互いの近況を確認したかったが、それは向こうに行ってからでいい。あんまり家に帰るのが遅くなると、姉が帰ってくるまでに夕食を作れなくなる。当番をサボったら本当に明日から毎食納豆にされかねない。

……ふむ、昨日の時点で食材は十二分に揃っていたから、スーパーに買い出しに行かなくても問題ないだろうな。ただし、昨夜、姉が作り置きに肉じゃがを大量に作ったから豚肉ジャガイモ玉ねぎは無いとみたほうがいい。

今日は厳寒。

体の芯から暖める食事が良いだろう。

ちなみに俺の得意分野は中華やカレー系統。そして姉は和食が一番得意だが、苦手な分野も特にはない。

「牛肉のカレー煮込み……は、時間がかかりすぎる。手早く作れるのがいいな」

確かピーマンと牛肉が余っていた。タケノコもあつたようだし、チンジャオロースにしようか。

となると献立は、それに合った中華風のものだ。白米は当然として、あとは春雨スープや白菜の炒め物とか。そうだ、デザートに杏仁豆腐も付けてしまおう。

メニューさえ決まれば後は楽だ。

うじうじ悩むことなんてなく、頭に描いた設計図を元に形にしてみさえばいい。

調理と鍛冶の接点が多い。たとえば、どちらも材料を鍛錬加工するところから始まり、最終的に製品料理を作り出すのだ。

……ま、どちらも道半ばのオレが言っても説得力なんてあつてないようなものだが。特に、鍛冶の方はダメだ。設計図ばかり巧くても、それ以降の過程はてんで失敗に終わる。それに引き換え姉さんは、オールラウンダーで羨ましいよ。

——と、そんなネガティブなことを考えているうちに、奇異な噂が無秩序に流れ流されている我らが沖田要塞に到着していた。「さすがに要塞はいい過ぎか。罨はあるけど、大砲とかは置かれていないんだし」

ちよびつとだけ侵入者に強い中庭つき豪邸。

そんなところ。

——そして、それを射た表現だとばかりに頷いて庭の各所に埋め込まれた石^{地雷}板をうっかり踏まないように気をつけながら郵便受けに入れてあつた書類に目を通すも、その内容にオレは思わず顔をしかめた。

「うわ、まだ諦めてないのか」

政府からだ。

A4版の紙三枚それぞれに、びっしりと細やかな文字で契約条項が書き込まれている。仮にそんなのを全て読もうとすれば途中で寝てしまいそうなので、取り敢えず比較的大きく書かれた重要事項っぽい箇所だけ読むことにした——

「……………へえ。この条件じゃ絶対に受けないこと、判つてるはずなのに」

イヤな感じがしたから詳しく読んでみたが、これじゃあ交渉の末に獲得した価値ある成果どころの話じゃない。死に方を選べと言っているようなものだ。

度重なる戦闘で心身ともに磨耗しての過労死か、はたまた国に殺されてオレの存在すら抹消されるであろう孤独死か。

無理な契約に従うのなら前者。

己の国に反逆するのなら後者。

最も大きい文字で書かれたものによれば、今日の六時まで指定のところに連絡しないと自動的に後者とされてしまうようだ。

この文面の様子じゃあ十分に検討するための時間は与えてくれないなさそうだし、本当にあと一時間しか残された時はない。

「はあ……………ったく、もし何かしらの事情で家に帰れなくて、これを知れなかったらと思うとゾツとする」

どうして己が殺されたのか。

殺され方は分かってても、大元の原因を知らないんじゃないか。死ぬに死ぬに死ねない。

……………放課後、引退してからしばらく行ってなかった部活に行こうと友人に誘われたが、そしたら死んだまま現世をさ迷い続けるはめ

になったかもしれん。

「さて」

運命の二択だ。

電話一本で全てが決まる。

もはや差し迫った死から逃れることはできない。服従か叛逆か。いずれにせよ、真つ当な死に様でないのは確かだ。

——さあ沖田総生、お前はどちらを選ぶ？

☆—☆—☆

「……………よし、戦争と洒落混もうか」

叛逆だ。

今まで言い様に利用されてきたんだ、もうそんなのは止め。準備が整うまで家に引き込もって徹底抗戦だ。

資金はある。武器もある。が、そこらのチンピラやヤクザと違って、正規の国家権力を相手取るとなると厳しいものもある。

圧倒的な兵力の差に、食料の問題に、その他もろもろだ。まともに戦って勝てる相手ではない。

——なら、

「すみません、そちら○○連合ですか？ ……………ええ、こちら沖田です。時は来ました」

「もしもし☆■組ですね？ ……………はい、わたくし沖田は生命の危機。正直助けが欲しいです」

「——もちろん全て計算通りですとも。この天才無敵な沖田さんにお任せあれ。皆で力を合わせる現代版戊辰戦争でこの国を洗濯してしましよう！」

力を貸してもらえばいい。

政府打倒、みんなで作れば、怖くない。

まあ、一昔前ならこんな大それたこと無理だ。そもそも一部の紛争地帯以外は平和だった昔なら、ましてや平和大国だった日本国がオレたちを馬車馬の如く働かせようとしなかったはずなので、いま起こそうとしている革命自体有り得ないモノのはずなのだ。

……そう、これは近頃の世界情勢が大きな混乱に見舞われているからこそのモノ。

先の大戦で浮かび上がった、世界各国と相克せし巨大な敵。あらゆる面で脅威足りうるソレに対抗するために抜本的な改革は避けられないのだが、現状この国はそうする気がない。数十年後か、あるいは数年後に必ず訪れる『死』に諦観しているとしか思えないほどに。

「——おおつと、もうこんな時間か。考え事してたら時間が経つのはあつという間だ」

これでは夕食を作っているヒマは無い。

せめて私服に着替えて、約束の病院に急がないと。

「そうだ。厄除けにこれ持ってこう」

偉大なる祖先より受け継がれし妖刀、大和守安定。当初は普通の名刀らしかったらしいのだが、少なくとも百年以上の時を血を浴びて過ごしたために、妖刀と言われるまでの存在に昇華されてしまったのだとか。

ともあれ、こんな禍々しいモノを持って出歩いたのなら、不幸すら猛ダツシユで逃げるに違いない。

「家の鍵も自転車の鍵も持った、厄除け刀は背中に背負ったし、いろんなが入ったバックも持ったから準備完了つと！」

裏門から出る。

表からの道のりは人が多く、なかなか先に進めまいと考えてしまったためだ。

「くはははははは！ やっぱ、こっちの道は思いっきり飛ばせるからいいわー！ くうくつ、気分爽快！」

冬の乾燥した空気のなか、己の力だけでペダルを漕ぐのは良い文

明だ。自分自身が風になったかのような爽快感はバイクの後塵を拝するが、一生懸命漕いだ後の疲労感やら達成感みたいなのは自転車でしか味わえない。

「あと少し。なのに、ここで赤信号か」

やや斜めに急ブレーキ。

……明日以降、家から出れなくなる。

今日が最後の走りだから勢いよくフルスロットルでいったが、少々スピードを出しすぎた。自動車に並走し続ける自転車とかいう珍風景を作ってしまったよ。

「よし。信号が赤から——っ！」

跳んで、倒れた。

視界が赤い。

衝撃は三度あった。

両手を見る。

どちらも死んだ。

だめだ。

もう何がダメかすら分からないがダメだ。

終わった。

何もかもが終わった。

消える。

消えるのか？

まだ何も為してないのに？

それはダメだ。

それがダメだ。

嗚呼。それがダメなのだ。

分かった。

理解した。

まずはそこから。

次に状況の確認を——

「遅い。脳天と心臓への直撃だけは本能で回避できたようだが、それ以外の箇所は全て的中だ。随分と鈍ったようだな、沖田総生。我が愚弟」

イマ。

トオクから。

ミシったダレかの。

コエが、した。

「詰みだ。この一撃で、幕は降りる」

コロぶ。

コロぶ。

またコロんだ。

カタナはもうモてない。

ならせめてニげようとしたノに。

どうして。

どうして。

どうして。

どうして。

ドウシテ。

「これにて終幕。反乱分子は他にもいるが、おまえさえ消えれば速やかに駆除できようさ」

オチル。

マッサカサマニ。

クラヤミニ。

アア。

ソウカ。

シンドノカ、オレ。
ナラ、モウイイカ。
ソシテハンテン。
スベテハハンテン、スル。

『?』

『。』

『!』

オレハひとり。
あいつらハカズシレズ。
カチメハナイ。
シツガキエタイマ、リヨウニテマサルカレラニカチメナドナイ。

『快?』

『快。』

『快快快快快!』

オレハシンカイへ。
奴らハソラヘトアガル。
シカシソコニモハイミハナイ。
ダツテ、オレハモウシンドノダカラ。
シンドオレヲエタトシテモ。
彼らニリテンハナニヒトツトシテナイ。

『!』

あいつらハアングイ。
オチャメトイウカ、ナントイウカ。
コンナトキニソンナコトラカンガエル。
オレモタイガイカ?

——この自嘲で、運命の歯車が、動きだす。

『うん、大概だよ大概。キミ面白いね。それによく視ると、これまた面白い運命を背負っている。』

——いいね、いいね、よし決めた。一度死んだキミに特別にチャンスをやろうじゃないか。“生き返れるチャンス”を、ね!』

——さあ、伸るか反るか、選びたまえ♪

『ま。つまらないが、伸らないのならそのまま黄泉に送ることになる。本当につまらないから言いたくもなかったけど業務怠慢と見なされるから仕方ない、人生に疲れたならそっちにでも逝けば?』

——俺は、いやオレは。

「オレに、チャンスを。頼む」

これより、試練が始まる——!

第一章 fate / stay night 編

——十年前冬、第四次直前—— 城下の誓い

意識が浮かび上がる。

陽光すら届かない深海より爛々と輝く蒼穹へ。

そしてさらに、漆黒のソラに揺蕩う「」へと。

……いや、それは根源という意味でのソレではなく、ただ其処を何と呼ぶかを思い付かなかったため便宜上「」と表したただけの話。

——其処はソラにあつてソラにない。

——其処は漆黒のはずが純白にある。

——其処は頼りとなれる目印がない。

——そう、つまり其処は。

『神々の住まう場所。どの世界線上にあつても座標が特定不可能つまり虚数世界に在るとされる場所。概念的には「」や座に限りなく近い場所。あえて付け加えるならば、ボクの私室にして客室。この中でならどの解釈でも構わないよ、キミ』

声が出た方向を見ると、そこには球体があつた。

もつとソレについて詳しく知りたいと何故か自然に思えたので、よく眼を凝らして見てみると、その周りには、薄い、円環のようなものが回転している。

『んー。今のキミには眼がないから、正確には違う表現になるのだけれどね。ま、そんなことは置いてだ。

……これからキミには試練を受けてもらうことになる。天界の理ってやつでね。それに当たって結ぶことになる契約を解消でき

るクーリングオフ的なのは一切無い。オーケー?』

ん、天界つてのは近代日本よりも個人の権利が制限されているのか。意外だな。

てか、考えてるだけで言葉には出していないはずなのに受け答えしてるってことは確実に思考を読まれてる。もし敵だったら厄介な能力だ。

『敵にはならないよ、特殊な能力を得ない限りはね。神殺しに高度なレベルの次元跳躍。』

それと——に至ること。

この三つのうち一つでも条件を満たせば、決められた権限の範囲内で殺しに行くけど、そんなことは有り得ないんじゃない?』

むむっ、思考が筒抜けになっている?

相手はどうやら本格的に神らしい。

——ならば、変えるべきか。

.....。

.....。

.....。パツと思いついた限りですが、一つ目はスカサハや両儀式が、二つ目はヒポグリフや白井黒子、三つ目はフェイトの魔法使いが当てはまるのでは?』

『んー、別にそこまでしなくていいよ。ボクの心は宇宙よりも広くて深いから気にしない。キミの好きにすればいいさ。』

それと神殺しの認識は正しいが、次元跳躍については違う。どの次元にでも行けないとダメなんだ。あ、最後に関しては、どうかな?』

ああ、なるほど。

それはそれとして、試練とか何とか仰っていましたが、あれはいつたい.....?』

『もう本題に入るのかい。仕事は下っ端に任せてるから暇なんだ、もう少し雑談しようじゃないか♪』

仕事、と云うのは見当がつきます。

わたしのような死者の案内でしょう。あのご時世、人が1秒に1人以上のペースで死んでいてもおかしくありませんし、下働きの人はかなりのハードワークを請け負っているはずです。

上が怠慢ですと下が苦勞します。

もちろん、そのことは承知していますね？

『しているとも。新人のキャリアを積ませたり、ボクだって気を遣っているんだよ。それにボクの事情についてアナタにとやかく言われる筋合いはないね。

……ああ、それとキミ、デスゲームといえれば何を思い浮かべる？』

ソードアートオンライン1択ですが？

一昔前の流行でそれも書籍化されたものしか知りません。なにぶんたった一年間の平穩で得られる経験は限られていますから。

『わかった、これで試練についての説明ができるよ。

……まず最初に、キミはこれから三つの世界に転生してもらうことになることについてだ。フェイトやとあるシリーズと、SAOの世界にだ。ここままで質問は？』

フェイトと言うからには月姫や空の境界は含まないのでしょうが、それにしたって範囲が広すぎます。わたしはいったいどの聖杯戦争に参加すれば？

『あー、そうか。なら、うん、わかった。ちよつとサイコロ振って決め

るから待っててくれ』

サイコロ……………。

この運命はサイコロで……………。どこかで聞いた話によりますと、くじ引きで次代の天皇を決めると云うのがありましたが、それ並みに……………。

『神のサイコロ舐めんなよ。これはな、必ず（ボクにとっての）良い目を出す代物なんだ。ある選択に困ったとき、これを振るだけで（ボクにとつての）最適解が導きだせるんだぞ。何度でも言う。神のサイコロ舐めんな』

凄い代物なのですな、そのサイコロは。

それで、結局何になったのです？

『ステイナイトになったようだ。……………ほう。よく視ると、大きな幹のように見える三つの生存ルートと、その他数多くのデッドルートに分かれている。ちなみに、それぞれのクリア難易度はノーマル、ルナティック、インポッシブルのようだね』

普通はいいとして、狂氣的と不可能とは。急に難易度上がり過ぎでは？

何をしたらそのようなのでしょうか？

『それは言えない。ネタバレってヤツだから。』

……………うーん。強いて言えば、どうやら手段を選ばなければルナティックはクリアできるっちゃあできるっぽいけど、それは手段を選ばなければの話だからねー、どうかなあー？』

つまり不可能ではないと。

しかし、そうであれば最後のインポッシブルと銘打たれたルート

が気になります。本当に文字の通り不可能なのですか？

『不可能は不可能だよ。そのルートに進んだら、試練の突破は不可能だ。生存さえ不可能に近いんだから、クリアなんて夢のまた夢さ。地球から何の器具も能力もなしに月まで歩くのに等しい難易度って言えば解りやすいかい？』

……………ええ。

もしそうならば、第二の人生を歩むことについて真剣に検討しないといけませんね。

『よし。次は試練のクリア条件についてだ。それは行く世界によって異なるが、今回は最初のステイナイトのだけを説明する。そこでのクリア条件は三つ。

一つ。第五次聖杯戦争に参加し、最後まで生き残ること。

二つ。キミ自身かキミのサーヴァントが第五次聖杯戦争の期間中に大聖杯を破壊すること。

三つ。最低五騎のサーヴァントが聖杯に回収されるまで大聖杯を破壊しないこと。

以上だ。これに関して、何か訊きたいことがあれば受け付けよう』

二つ目の条件についてですが。

つまりは、わたしやわたしのサーヴァントではない人間が大聖杯を破壊すればクリアにならないと云うこと？

『そうだね』

三つ目に関して。聖杯は白黒問わず？

『それらの合計とを考えてくれればいいや』

では最後に。

万が一、第五次聖杯戦争中に破壊できなかったとします。その後、何らかの方法で時を遡り、もう一度参戦してクリア条件を達成した場合は？

『次の試練にシユート！』

了解しました。

ああ、そういえば転生ものには特典が付き物だった気がしますけど、それは？

『なんだいノらないのかい。』

……コホン。それは一つだけ良しとしよう。ただし、著しく試練の突破を容易くするようなものはダメ』

ならば、わたしが望むは一振りの刀。

一族に代々伝わる家宝の1つ、妖刀大和守安定を持ち込みたい。

『ふうん。どれどれ………ん、これは。ははあ、構わないが、扱いきれるかキミに？』

相性が良かったようで。手入れしてれば切れ味は文句無しですし、扱いきれるも何も既に扱っていますか？

『いや、そういうのじゃなくてだね。もっところ、うーん、まあいいか、なあ………。ちようどいいハンデで、しかも物にすれば強力な武器だからボクとしては大歓迎なんだが………』

良かった。持ち込み可ですね？

承った試練をクリアして、元の世界に帰らないといけないといけ

ません。他に説明事項が無いのでしたら、はやく向こうの世界に飛ばしてください。

『アナタがそう言うなら。』

あとは……そう、キミの境遇は向こうに逝けば自然と分かるだろうからここで説明はしない』

『——では最後に。健闘を祈る』

その言葉を合図に、私の意識は、下へ下へと落ちていきました――

「……………契約について、詳しい説明はしてなかったけど、もう行っちゃったから是非もなし、だろうね」

29

☆—☆—☆

——そして、年月は経過し。

「……………じゃあ、父さんも約束する。イリヤと生継のことを待たせたりしない。父さんも必ず、すぐに帰ってくる」

そう言つて、衛宮切継はイリヤスフィールと、オレ——衛

宮生継の肩を長らく固く抱き締めてから背中を向けた。

第五次聖杯戦争より十年前。第四次聖杯戦争が、もうすぐ始まるうとしている。

「じゃあ、イキツグ。お城に戻ろっか」

森の奥だ。

住処のアインツベルン城から随分と離れてしまっている。今日は霧も晴れていい天気だが、辺りに雪が積もっていることから判るように寒いものは寒い。

それに原作の知識を知ってしまったているオレだからこそそのものだろう、目の前にいる姉イリヤの両親の衛宮切継とアイリスフィールはこの戦いで命を落としてしまう、そのことを知っているのに何もできないのが、ひどく辛くて悔しい。下手に原作介入を行えば試練の達成に支障を来す、そんな利己的な理由で最も近くにいる人を助けられない。

そんなのは――。

「――ね、イキツグ。泣きたいときは、泣いたっていいんだよ？」

「――え？」

言われて、気づいた。

瞳に溜まった涙で、覗きこむイリヤの顔さえボヤけて見えないことに。

「お母様に聞いたことがあるわ。そうやってずっと胸の裡で抱え込んでいると、いつしか壊れちゃうって。だからね、そういうものは早めに吐き出しちやいなさいって」

涙を拭う。

けどなんでか、拭っても拭っても止まらない。いまのイリヤの言葉で決壊したのか、それともそんなトコまでも年相応に戻ってしまったのか。

「(いや、でも――)」

たまにはこういうのも、悪くない。

泣いたっていいじゃないか。見た目は子どもなんだから世間体なんてものもない。

戦って、戦って、戦い続けて。

束の間に得た本当の安息。

折角だ。こんなときくらいは、仮に実年齢は年下でもこの世界では姉ってことになってるんだ、胸を借りて泣いても、いいじゃないか。

——そうして、どれだけの時が経ったか。

「……………もう、大丈夫だ。戦える。ありがとうな」

これで、しばらくは持つ。

次の第五次聖杯戦争。それに向けて、今のうちから色々と準備をしなきゃならない。まずは召喚方法を、いや、それよりも先に。

「イリヤ。いや、姉さん。約束する、オレは絶対に姉さんを死なせやしない」

最後まで姉^{イリヤ}を守り抜く。

それを、この試練のクリア条件として自らに課そう。たとえ足枷になったとしても、オレはこれを譲る気はない。

「——」
イリヤは突然そんなことを言われたからか、戸惑っている様子だ。

無理もない。日頃のオレの態度から判断すれば、気でも狂ったか、とでも言われそうだなと我ながら思うのだ。悪く思うなよ、おまえがオレをそうさせたんだから。

「さあ戻ろうか。アイリスフィールは、オレたちがなかなか帰ってこない事に気を揉んでいるだろうしな」

何だか気恥ずかしくなって早口で言っただ姉さんの手を引こうとしたときだった。

「いっつう……………！」

雪に滑って転んだ。

なんとという屈辱。格好いいこと言った瞬間にこれとか、今日はラッサーだ。

「ふふっ……………ごめんね、つい笑っちゃった。

でもこんな頼りない姿じゃあ、レディを守ることなんてできない

わよっ。」

ぐぬぬ……………」

この言われようも仕方ない、仕方ないのだが、如何ともし難い辱しめ、どうしてくれようぞ……………」

「だからね、代わりにイリヤがイキツグを守ってあげる。それでいいでしょ？」

眼を細めてニイツと笑うイリヤ。

こんな幼女のときから小悪魔の素質があるとは驚きである。かわいすぎだろ。

——が、それに甘んじるつもりは毛頭ない。差し伸べられた手を取らずに自力で立ち上がり、真っ直ぐイリヤの眼を見て決意する。

「……………ふん。じゃあこうしよう。オレは姉さんを守る。姉さんはオレを守る。これでどうだよ？」

互いに互いを守り合う。

これからずっと仲が決裂しなければ、次の聖杯戦争にて強力な布陣が出来上がる。

もつとも、そうなった場合は衛宮士郎や遠坂凜と敵どうしになるだろう。

すると姉さんは、でもねと言って続ける。

「キリツグは、必ず帰ってくるって言ってたよ。だからキリツグがイリヤとイキツグを守ってくれるわ」

オレは、それが有り得ないと知りながらも。

「——ああ。必ずお父様は帰ってくるさ」

そうやって、嘯くことしかできなかった。

——十年前冬、第四次前後—— 旅立ちの刻

「……………うつわ……………」

城に戻った。

雪道で二度と転ばなかったのは幸いだったが、それと引き換えにかトンデモナイものを見てしまった。

「あらイリヤ、イキツグ。お外はもういいの？」

それは重量感がある扉を開き、内部を見た瞬間の出来事であった。いつもはノック等をするのだが、あるいはそれを怠った報いなのかもしれない。

「だってキリツグは行っちゃったしお母様は来ないんだもの」

これは、オレがこの世界に来たために起きた原作改変の一つとも考えられる。本来のソレは、衛宮切継もこの城にいたときのシヨツキングな事故だったのだが…………。

「それより——ソレ、なに？」

姉さんのその言い様には共感できるが、原作を知る身としては弁護の一つもしたいものだ。

なぜって、彼女はアイリスフィールのお遊びに無理矢理付き合わされた被害者なんだから。

「作戦の練習中なの」

美少女英霊セイバー☆ナイツ。

そう、フェイトの顔でお馴染みのアーサー王ことアルトリア・ペンドラゴンさんが魔法少女な衣装に変装して出来てしまった一つの悲劇だ。

原作では切継もこの場面を見てしまったため、余計にセイバーさんの黒歴史化に拍車がかかったのだけれど、この世界線では子ども二人に見られただけだからまだマシだと思う。

しかし、このままではセイバーがあまりにも惨めだ。フォローの一つでも入れてから部屋に戻るとしよう。

「あはは。姉さん、流石にソレ呼びは可哀想です。せめて本人が名乗った美少女英霊セイバー☆ナイツとお呼びしましょう。それが、長つたらしいので略して美少女ナイツと。」

……ククツ、美少女ナイツさあん。その衣装、とおつてもお似合いですよお？」

ダメだ、笑いが、笑いが抑えきれない……………!!

いや我慢だ、部屋に帰るまで我慢するんだオレ!

じゃないと、セイバーさんが暗黒面に堕ちてしまうんだっ!

……………くつくつと笑いを堪えながらドアをそつと閉じて、背後を一度も振り返らずに自室までの長い廊下を歩く。

完全に閉じられる直前に何かうめき声のようなものが聞こえたような気がしたが、きつと気のせいだろう。

「イキツグ。アレ……………じゃなくて、美少女ナイツって何だったのかな?」

「姉さん。たぶん美少女ナイツはね、天真爛漫なアイリスフィールを主(偽)に持ってしまった故に顕れたセイバーの一側面なんだよ」

よくよく考えてみれば、あの黒歴史はオレにとってラッキーだ。十年後に敵になる可能性がある以上、セイバーの弱みは幾らでも握っておいて損はない。

もつともアレでは動揺させる程度の材料にしかならないだろうが。逆上されても困るし、取扱いには細心の注意を払わないと――

……………そして、それから二週間が過ぎた。

聖杯戦争は原作どおりの結果。衛宮切継は聖杯を破壊し、アインツベルンの挑戦は又もや失敗に終わった。

それを受けて、八代目当主アハト翁はオレを礼拝堂に呼びつけた。おそらく今後の方針を確認するのだろう。

「来たか。……………早速だが、おまえは冬木に行き、次の聖杯戦争に向けて万全の態勢を整えるための下準備をしなければならぬ。これからすべきことは分かっているな?」

「はい。もちろんです、お爺様」

すべきことは大まかに三つある。

一つ。第四次聖杯戦争で敗北を喫したら衛宮切継は魔術刻印を息子に譲らなければならない、という契約の履行。

一つ。息子——つまりオレは、第五次聖杯戦争でアインツベルンを勝利に導くべく、課される鍛練を完璧にこなさなければならない。

一つ。……………これは戦争直前のこととなるが、イリヤスフィールとそのサーヴァントを勝たせられるようなサーヴァントを召喚すること。

この三カ条は産まれたときから記憶にある。

曰く、アインツベルンのホムンクルスは人間との混血であっても胎内で調整を受けるのだという。きっと、そのときに覚えさせられたのだ。

「ウム。くれぐれも切継のような裏切者になってくれるな。期待しているぞ、衛宮生継」

「……………努力します。勝利はアインツベルンに」

「よし。ああ、それと——。お主に渡さねばならぬものがあつ

た」

いま思い出したとばかりにお翁様はアレを持ってくるようメイドに命令し、そのメイド、セラに似た、いやセラが似たホムンクルスは慌ただしく礼拝堂を出て行った。どうやら「渡さねばならぬもの」とやらを取りに行ったらしい。

……なんだろ、魔導書とかか？

アインツベルンは錬金術の一族。もし本を貰えるのなら錬金術に関するものだろう。それとも、記憶を精査しても見つからなかったエクストラクラスの召喚方法についての本を渡してくれるのかもしれない。

「お館様、この木箱でよろしいでしょうか？」

しばらくすると、出て行ったホムンクルスはまたも慌ただしく帰るなり、そう敬々しくお爺様にその木箱を手渡した。お爺様はこれに重々しく頷くと、密度の籠もつていそうなその木箱をそのままオレに差し出して仰った。

「これはお主が生まれた直後に現れたモノだ。差出人は不明、そもそもこの冬の城にあのようなモノを送りつける者がおるはずもない」

彼の国ニホンの文化ではこの贈り物で腹を切るのが慣習らしいが、と付け加えて続けた。

「……………ならば、これも一つの運命やもしれぬ。お主はハルバードの代わりに、これを護身の武器とするのだ。身体能力は並みのサーヴァントとなら五分に渡り合えるように設定した。いざとなれば、身を挺して天の杯イリヤスフィールを守るのだぞ」

それに了解の旨を伝えて廊下に出た。左手には木箱から取り出した刀がある。制限時間は聖杯戦争が終わってから一年後まで。オレの身体能力はアハト翁が言った通り、常人やそこいらのホムンクルスの枠を大きく逸脱しているが、代償として活動限界は彼らよりもかなり短くなっている。およそ十八年。無理をすればさらに寿命は縮

まる。もし聖杯を破壊できなかつたらと第2候補を用意していたが、それも無駄骨だ。

「次はない。なら、」

確実に聖杯を壊せる方法を。手始めにルーラーを召喚して、次に対城宝具を所有するセイバーのマスターから礼呪を剥ぎ取る。きつと嫌がるであろうセイバーにルーラーの礼呪を使つてしまえばコトは済む。アサシンや他のクラスでも代用は利くが、そうしてしまうとオレの礼呪のかなりを消費してしまうだろう。万全を期するためには数多くの礼呪を持つルーラーの召喚が不可欠だ。

「(だが、)」

試練を乗り越えるには多くの障害がある。他のサーヴァントやマスターの存在は当然至極厄介であるが、ルーラーの敵ではない。最大の問題は二つ。……いや、一つに絞れる。強力な対魔力を持つセイバーを押し退けて衛宮士郎から礼呪を奪うことは面倒だが、時間を掛けて考えれば策は幾らでも閃きそうだ。

——そう、一番の難所は味方陣営で、アインツベルンが勝ち抜くことだけを考えるならば頼もしいバーサーカーの存在だ。Aランク以上の攻撃しか通用せず、十二回分も殺さなければ倒れない不撓不屈の大英雄。

試練を突破するには、五人のサーヴァントを消滅させてから大聖杯を破壊しなければならぬ。オレの目論み通りになれば、ルーラーとセイバーの都合二枠は埋まることになる。バーサーカーは残して、第八のサーヴァントこと英雄王ギルガメッシュを討伐する手もあるが、原作からして彼の王を何とかできそうなのは二人と一つしかない。アヴァロン持ちセイバー、衛宮士郎、そして黒い影だ。

前者二人は衛宮士郎の協力と信頼が必要不可欠だが、残念ながら礼呪を強引に奪つたら信頼関係どころか、彼にとってオレは敵ではないはず。

そして後者は論外。イレギュラー ヤツが出てきた時点で戦略なんてご破算だ。アレが現出したら、あらゆる手で以てセイバーと衛宮士郎の保護に全霊を尽くすしか道はない。

「ならば」

四騎が倒れた後にバーサーカーと英雄王をぶつけ、バーサーカーが敗れたら姉さんを保護し、急ぎ大空洞に直行。言峰綺礼やギルガメッシュなどのボスキャラが来る前に目標を破壊すれば、晴れて第一の試練突破だ。

「これでよし。さて、っと」

大図書館だ。

壁という壁に本棚が隙間なく埋まり、本棚という本棚には本がこれも隙間なく埋まっている光景はいつ見ても壮観である。

なぜ出立前日にここに来たのか。あらゆる事象に原因があるように、これにも当たり前の訳がある。アハト翁にバレないように、エクストラクラスの召喚に関する書物を冬木の城に持っていくためだ。なぜお爺様にバレてはいけないのか。それは記憶を何度閲覧しても其の召喚に関する記述は見当たらなかったことから判るように、アハト翁は其れの召喚を歓迎していないからだ。この時点でアヴェンジャーがやらかしたコトを彼の翁は関知していないはずだが、それは違った考えで其れの召喚を阻止したいのだろう。

しかしオレには原作知識がある。アインツベルンが其れの召喚方法を確立していることをお爺様がどんなに頑張ってひた隠しにしようとも無意味だ。

……とは言え、木を隠すには森の中。数千数万の書物から一冊の本を探するのはなかなか骨が折れたので、その一点にかけてアハト翁の工作は意味を為したと云える。

「これ、これっと」

だが、一度見つけてしまえばあつけないものだ。手にとった目的の本をこの日のために作った外見だけ似せた偽本とすり替えたらミッションコンプリート。あとはトンスラして自室に戻るだけ……っと、誰か来たようだ。

「お坊ちやま。これから晩餐会を開きますので、広間の方へお越し下さい」

「なんだマジアか。わかった、すぐに行く」

誰かと思えばオレの付き人、マーギアだった。何年も前に前世の教科書に出てきた登場人物で、最も苦手だった人物名を彷彿とさせるためマギアと略している。

当の本人は己に付けられた名前を大事にしているため、ため息ながらに「マーギアです。はあ、何度訂正されれば気が済むのでしょうか……」と、その都度小声でごちるのだ。ちなみに、オレがマギアのことをマーギアと三回呼ぶかどうかを二人で賭けていたりする。オレはもちろん呼ばないに賭けた。

「さてね。そういや、マギアも冬木に着いてくるのか？」

「付き人ですから。私は魔術をお坊ちやまに教えるためだけに造られたもの。その役割は十全に果たさねばなりません」

一つ目のイレギュラー。

彼女は、オレが衛宮とアインツベルンの間の息子としてこの世界に転生すれば十中八九発生するホムンクルスだ。彼女が生まれない世界があるとすれば、それは第四次聖杯戦争が通常の世界線と異なった場合か、あるいはアハト翁が賢明でなかった場合の二つのみ。

普通、裏切り者の息子を裏切り者その人に預けて任せるヤツはいない。いたとすれば、そいつはそこまで考えの及ばない愚か者か、あるいはそんなことは折り込み済みでの確な対処法を用意してある策謀家だけである。

オレの憶測では、アハト翁はそのどちらでもない。考えなしで動く猪突猛進バカでもなく、かといって並外れた戦略家でもない。ある物事に対して対策を建てて実行する戦術眼と実行力はあるくせに、結局のところ建てた策はどれも悉く空回りして失敗する。

聖杯戦争は一筋縄ではいかない。せつかく建てた戦術も予期せぬイレギュラーによってご破算になる。局地的に成功しようとも、大局的に失敗すれば大きな痛手となる。

一つの例を挙げよう。第四次聖杯戦争にて、征服王イスカンダルが大勢のアサシンを全滅させたシーンだ。理想の王と人を超越せし王にその勇姿をありありと見せ付けつつ、逃げ惑うアサシンたちを容易く脱落に追い込んだ、一石二鳥の一手だと思っひとも

いるかもしれない。しかし、考えてもみてほしい。彼の王はそこに辿り着くまでに、既に手持ちのカードを、ただ一つを除いて切っていた。そう、ただ一つを除いて。アイオニオン・ヘタイロイ“王の軍勢”。臣下との時空を越えた絆から昇華された対軍宝具。対象を固有結界内に引き摺りこみ、“座”より召喚された数万の戦士と共に敵に突撃し、これを殲滅することを目標にした、まさに切り札。ジョーカー……が、それだけに魔力消費は著しい。それは、この宝具を使用したあと、実体化が危うくなる状態にまで追い込まれたほどに。彼のマスターであるウェイバー・ベルベットの一計により、一度ならばその宝具を使えるほどに魔力は回復したが、あくまでも“使える”だけだ。これは私見だが、ギルガメッシュの宝具がいくらEXランク級の超強力な対界宝具だとはいえ、アサシンごときに使ってしまった宝具分の魔力と三回分の礼呪の魔力があれば、結界の維持時間をさらに延ばせることができたかもしれない。そしてもしそうなれば、征服王イスカンダル自身の固有結界内という有利な状況下であれば、ギルガメッシュのもとにまで辿り着いて、或いは打ち倒せたかもしれない。

……やや前置きが長くなってしまったが、このことから分かるように、一つの戦いに圧勝したとしても、それは戦争を構成する数多くの戦いのうちの一つに過ぎない。たった一度の勝利のために、しかも敵——セイバーやアーチャーが見ているなかで、最大の切り札を切ってしまうのは如何なものか。

情報戦に勝利した者が最後に笑う。これはオレ自身の生前の体験から自ずと理解できた一つの鉄則である。

例えば、入試の過去問。この情報が無ければ、その学校が出す問題の傾向は分からずに、結果戦々恐々とした精神状態で入試に挑むことになる。

例えば、敵の配置やその戦力。これらについての情報が無ければ、敵がどこに布陣してどのくらいの脅威があるのか分からず、下手を打つとまんまと取っ捕まったり射殺されたりする。

……まあ要するに、コトによると情報は命に関わるくらい大事ということだ。あれ、いつの間にか論点ズれてね？

「……、ね、イキツグ？　　ねえつてば！」

はっ、として思考の渦から現実の世界に帰ってくると、おかしいなーと首を傾げつつオレの肩を揺さぶるイリヤスフィール姉さんがお互いのデコがくつつき合うぐらい近くにいた。

「おや。姉さんがどうしてこんなところ、に……」

何度か瞬きして眼のピントを合わせると、思わぬ風景に語尾が断裂し、ついには何も喋れなくなった。

落ち着け自分。なぜか知らぬ間に広間にいるという謎を解決するには冷静沈着たる思考が必須だ。直前の記憶を思い返す。そう、確か、マギアと図書室で会話を。彼女が思考の迷宮に落ちる取っ掛かりとなったのだ。冬木、付き人、晚餐、晚餐会……：晚餐会、これだ。これなら広間にいるのは納得だ。これは推測だが、おそらくオレはマギアの言われるままに広間へ付いていき、テーブルにあったであろうご馳走を口に運んだのだ。空になった大皿の食器と、汚れたフォークやナイフから簡単に想像できる。

——問題は、なぜ記憶に穴があるのかだ。

思考に埋没しただけで記憶が抜け落ちているのなら、オレのそれはミニガンに装填された全弾丸を撃たれたヒト並みに虫食い状態だ。当然そんな可能性は有り得ない……：はず。

「姉さんは、肩を揺さぶる以外に、何かした？」

引き金がイリヤスフィールだということはまずない。なぜなら、図書室にはマギアと二人きりだったし、それ以上に姉さんを信じたいからだ。

その逆。つまり、イリヤのお陰で記憶の消去が打ち切られたと仮定する。仮にそうだとすれば、彼女に訊ねることで原因を突き止められるかもしれない。そうした考えから来た質問だ。

「………何もしてないよ？」

むむ。つまり、肩を揺さぶることが、そのまんまトリガーだったと。肉体への干渉で精神が引き戻される例は多々あるから納得はで

きるが、それでは記憶が消えたことに説明がつかない。

「あつ、でも、そのヘンなのを手から外したわ。ひぎに乗るのに邪魔だったもん」

姉さんはにへらと笑って、〃ヘンなの〃を指さした。

「なにっ。これが!?!」

それは刀だった。

前世の唯一の名残であり、家宝であり、相棒でもあるこの刀が原因なのか!?

……否定できない。むしろ、ソレを始めから疑わなかった自分を疑う。前から怪しい素振りがあったのだ。この刀で人を斬るとき、なぜか一瞬そいつの記憶らしきものが毎回頭に入ってくる。血印を押すために、この刀で指を切ったら、自分の知らない経験が勝手に入ってきたこともあった。

結論、ギルティ。

解決急ぐべし。

「マギア、冬木へ向かうぞ」

「だからマーギアとお呼び……今なんと?」

「すぐに支度を。解決しなきゃいけない課題が山積みだ。ほら、早けりや早いほいほいって言うだろ?」

「準備はできております。いつでもどうぞ」

「おお。すごいな。じゃっ、行くか!」

行き先は前途多難に違いない。

なにせ神様が用意した試練だ、そうでなければ歯応えがないし、つまらない。

これはまだ一つ目の試練。

第五次聖杯戦争、これを勝ち抜き大聖杯を破壊することで、次のステージに行ける。

しかし、その前に――。

「マギア、頼みたいことが二つある。まず、向こうに着いたら早速この刀を最優先で調べてくれ。なんだか嫌な予感がするんだ」

「なんなら壊してしまった方が良いのでは？　いくら大旦那様から授かったモノとはいえ、妖気のような靈気をあからさまに放つていますし」

「ダメ、勿体ないし。それともう一つ。魔術と魔力について、詳しく知りたいことがあるから教えてほしい」

「判っております。それが私の役目ですから」

修行だ。

十年後に勝利を掴み取るために。

一千年の妄執、五体のサーヴァント、最強の英霊何するもので。必勝を誓うオレには必然的に敗北の二文字は無い。

「勝つぞ」

「言うまでもないことにございます」

こうしてオレたちは、まだ見ぬ十年後に向けての下準備をするべく、ドイツから冬木のアインツベルン城へ旅立つのだった――

——九年前秋、冬木市到着—— 地獄を越ゆ

「なあマガア。生きてるって素晴らしいって。そう、思わないか？」
「ええ。生きとし生けるものは皆死ぬ定めにあります。私たちがまだ死を迎えてはなりませんから」

郊外の森の奥に佇む城。

その2階にあつて戦いの爪跡が残っている廊下で見事に意見が一致したオレたちであるが、今までのデスパレードを振り返れば息が合う程度のこととは当然の帰結といえよう。

——これまで毎日のように死に直面していたために、異質な刀が記憶に影響を及ぼしていかないかをマトモにチェックできていなかった。メンテナンスついでに、向こうのアインツベルン城からこつちのアインツベルン城に命からがらに來れた軌跡を振り返ろうと思う。

まず始めに姉さんと別れの挨拶をし、お爺様の激励を受けてから、この先の前途多難を象徴するかのような猛吹雪に下山途中見舞われたものの何とか飛行場に辿り着き、そこからプライベートジェット機に乗ってホッと一息ついて食事を楽しんでいたら、突如起こった燃料漏れのせいで切りもみ回転し始めた機体から慌てて脱出し、予め用意してあつたパラシュート(燃料漏れといい、故意的なものを感じる)で七千メートル級の高山の頂上付近になんとか無事に着陸するも、人ひとりを軽く吹き飛ばせるような烈風と触れただけで皮膚が溶けそうなくらい冷たい豪雪の相乗効果が織り成す紅蓮地獄やその他もろもろに見舞われたために、たつぷりと丸三日間かけて慎重に踏破し、ようやく人間がマトモに住めるような村に着いたのだが、村に紛れ込んでいた一匹の死徒によって善良だった村人全員が揃ってグルル化してしまったこと(まことにふざけている!)には流石に温厚なオレも怒りを禁じ得ず、殲滅しようとしたけれども、殺せたのはグルルだけで元凶の死徒には攻撃の一つも通らなかつたため、後は死徒を追つてきた別の死徒に任せて、日本行きの船か飛行機があるような大きな

街に向かったのだが、そのような都市に着くまでの運賃や食費に思いのほか出費が出て手持ちのお金が露と消えてしまったために、気配遮断EXで裏の組織を尾行し、そいつらが所有する密輸船に機を見計らって潜入、ウン週間の船旅のすえにこの地にやっこさつとこ辿り着いたってわけだ。

「まさか港で父様と鉢合わせるとは思ってもみなかったが。あの様子だと旅行ではなく交渉が目的だったようだな」

「そんなことよりも。荷の整理は完了致しましたので、早くあの裏切者から魔術刻印を剥奪してしましましょう。本来はあのような下賤な者の家など入りたくもありませんが、契約は守らねばなりませんからね。ええ、そうですとも」

小憎たらしい笑みで篡奪を謳うマジア。……こやつ、セラの三割増しで陰湿やもしれぬ。

「もちろん契約は遵守されるべきものだ。ついでに言っておくと、騙して悪いが」なんて良識のある人間のやることじゃない」

ま、アイツラに対しては正当防衛という大義名分があるぶん遠慮なく殺れるらしいから、楽といえれば楽なのだとか。たちの悪さで言えば、世の中にはアイツラ以上に厄介なヤツがいると言う。契約書の中に言葉の罫を仕掛けてくるヤツとか、そもそも契約すら結ぼうとしないヤツとか。

後者は意外といるが全体から見れば少数派で、そういうやつは相手にもしないからどうでもいい輩だそうだ。放置したほうがむしろ安全な危険物とも云える。

真に厄介な輩は前者であるらしい。契約後に気付いても後の祭りなので、そのような者との契約は一文一文吟味しなければならぬ。四次に於いてのランサーのマスターであり、時計塔の有力者^{ロード}でもあったケイネス・エルメロイ・アーチボルトは彼らの被害者の典型例だ。前もって人質を確保され、逃げ場をも無くした彼には罫を見破れる判断力は残されていなかった。かくして、ランサー陣営は全滅したのである（もつとも、ケイネス・ソラウ・デイルムツトの三角関係が

ある限り、セルフ・ギア・スクロールによる契約が無くても、いずれ何処かで野垂れ死んでいただろうが。

そして、哀れな被害者^{ランスアー陣營}を直接的に死に追い込んだ加害者は現世においてのオレの父親である衛宮切継だ。マギアは彼から魔術刻印を剥ぎ取れるとほくそ笑んでいるが、正直オレは心配で仕方ない。あの一癖も二癖もある衛宮切継だ。何かがあるに違いないとオレは訝しんだ。訝しんだのだ、が！

「——これで、移植手術は完了かい？」

「……………そうか。もしよかったら、日も暮れているし今晚衛宮邸に泊まっていくといい。いろいろと、訊きたいこともあるからね」

「いえ、結構です。これで貴方への因縁は切れましたので。本来なら殺すところを、見逃してあげているのですから、これ以上を求めるのは強欲でしょう？」

何事もなく、契約は履行された……………！

魔術への未練は無いのか、蓋を開けてみればマギアの手によつてあっさりと、魔術刻印は衛宮切継からオレの左腕に移植されていた。

はるばるドイツのアインツベルン城から、ここ冬木市まで散々トラブルに遭ってきたオレたちだ。この衛宮邸でも何かがあると確信していたがしかし、良い意味で想定外の範囲外の結果に終わった。

「マギアもこう言ってるしき。しばらくオレたちは片付けがあつて忙しいから、衛宮邸に泊まるよりも城^{あつち}に泊まったほうが何かと都合がいい」

戦争になつたときに衛宮邸に居ても怪しまれないくらいの信頼関係を作るための仕込みをしたいのは山々だが、今は刻印抑制薬の用意や城の建て直しで手一杯だ。

「落ち着いてきたら週に一回くらいは衛宮邸に泊まるから、さ。それ

までは」

そう言い残して、空き部屋の一角からマギアと共に外に出た。

『それまで』か。いったいいつそのときは来るのやら。アンリマユの呪いで衰弱死する前にまた会えるだろうか。

「……………ん。あいつは——？」

ふと、目に留まった。

一般的な日本人の特徴を逸脱した銅色の眼と髪。彼の体重を上回っていそうな重さの段ボール箱をせつせと運んでいることから判断する働きたがり屋な性格。後に「穂ノ原のブラウニー」と陰で語られるその人物の名は——。

「衛宮—— 士郎」

口の中だけで呟いていた。

十年後戦うことになる敵。選ぶヒロインと選択肢によって彼を取り巻く世界の未来は大きく変わってしまう。

「(間桐桜には悪いが、桜ルートは絶対に阻止しないと。未来は確かな方がいい)」

セイバーオア凜ルートを歩む運命の彼に衛宮士郎軽く挨拶と会釈をし、程なくして帰路に就く……………予定だったのだが、オレがこの世界に転生したことで何か想定外の異常が起こっていないかを念のため調べることにした。

「お坊ちやま、恐れながら方向が違いますかと。どこへ行くおつもりです？」

「まずは穂群原学園経由で桐洞寺。そんな次に商店街に寄って、橋の向かい側の教会に行く。それから城に帰るつもり」

「……………承知しました。街の構造を把握するためですね？」

「——」
頷きで返す。

確かにそのためでもあるからだ。が、最大の理由は、世界の現状とオレの認識との相違点を埋めるため。もし原作と変わった箇所が無くて、過去の自分が間違ったものを正しいものとして刷り込んで

しまっている可能性があるのだから。

「あ、そうだ、マギアは辛いもの、苦手か？」

「私に食べ物の得意不得意はありません。度が過ぎていなければ問題ありませんが、それが何か？」

「ちよつと気になる中華屋があつてね。そこの評判メニューを食べてほしいんだ」

進路変更。商店街で早めの夕食を済ませてから他を回ることにした。

マギアが『度が過ぎていなければ』と念を押したが、その程度でオレが退くと思つたら大間違い。あの仏頂面を崩すにはもはや手段を選んでらんねーのである。

「よーし。見てろよ、必ずその顔を恐怖に歪めてやるからな……！！」

そう意気込み、マウント商店街の中華屋“紅洲宴歳館”泰山に來たのだが――。

「ほう。このマーボードーフとやらが出てきたときは嵌められたと思いましたが、これは存外にイケます。店主さん、お代わりを頂けますか！」

輝いていた。

かつてないほどに、マギアという一人の女性の瞳は輝いていた。赤を通り越して赤黒い。鬼のような香辛料が変な風にそれに混ぜられているのか、あの料理から立ち上る蒸気だけで網膜が痛む。もの試しに少し貰ったが、ほんの小皿一つの分量だけで唇が焼けただけるよう。

「ハフ、感謝します。このような素晴らしい料理を教えてください。心の底から感謝致しますよイキツグ様！　ハフハフ、モグモグモグ……」

……。なんか、メイドがマーボー食ってる。

メイドらしくお上品に。彼女の周りの空間だけ魔王の魔窟から何処と無く気品溢れるものに様変わりしてしまったような気さえず

る。

「………………。しばらくマギアさんは此処に居座ってそうなので、無難そうな甘酢あんかけ系を注文することにした。

「すみません——あま『麻婆豆腐を一つ』——っ！」

何者！

声が出た方を睨むと、そこには一人の神父。

言峰綺礼……………じゃない。あの白髪。ご老体の姿。それでいて神父服を着ている。まさか——？

「申し訳ない、途中で割り込んでしまった」

「いえいえ、お気になさらず。……………それよりも、貴方に訊きたいことが——」

「……………なるほど。分かりました。では、後ほど」

イレギュラー
ご老人とは教会で話すことになった。前回の聖杯戦争についてだ。

彼の神父が残っている。それは原作と明らかに乖離している事実だ。

マギアはオレが来たことで現れた、この世界に居てもおかしくないイレギュラーだ。それにオレの味方なので問題なし。しかし、言峰璃正の場合には全く話しは違ってくる。オレの第四次への介入は無かった。つまり、四次は原作通りの過程を辿り、原作通りの結果に終わった。そのはずだったのだ。おそらく、オレの知らないモノが蠢いていた。あるいは、今現在も蠢いているのかもしれない。徹底的に検証する必要があるな。

「戦う前に勝負は決まっている」

この名言は情報のあるなしがどれだけ命取りになるかを的確に表している。

これから十年。修行と人間関係の構築にさえ打ち込めば勝利に届くと考えていたが、それは大きな間違いだったようだ。まず何よりも重視すべきは情報収集と集めた情報の取捨選択。ルーラー召喚には一つ、大きなリスクを背負う必要があるし、優れた諜報力を持つアサシンの召喚も視野に入れておくべきか。

「…………ふむ。マジア、もう食べ終わるよな？」

「いえ、いえっ！　これからお代わりを、むぐー！」

「ダメ。あんまり長い時間待たせちゃ悪いし、これで終いだ。会計して、教会に急ぐぞ」

神父にはこちらから相談を持ちかけたのだから、いつまでも待たせては失礼になる。そう考え席を立ったオレは、追加注文を頼もうと手を挙げた食^マいしん^ギ坊の腕をそのまま引っ張ってお会計を済ませて、やっとな店を出た。

私は所詮従者ですから、従者の食事のことなど気にせずとも結構ですと日頃言っていたが、こんなに食べるなら確かに気にしなくてもいいと思う。

「どれだけ食べたんだって？」

…………そりゃあ。支払い金額が五桁の大台に乗ったとしか言えない。彼女の沽券に掛けて。しかしまだ食べ足りなかったのか、珍しく人目を気にせず不機嫌そうに眉を寄せるマジアを横目に見て、体面を保つよりも麻婆豆腐のお代わりの方が今の彼女にとっては大事になったのだなあと驚き呆れつつも、常にアインツベルンの貴族らしく誇り高くあろうとしていたマジアが、食事一つでそんな表情を見せるようになったことに、何となく気分が良くなるのだった。

「よし、マジア。あの店は年に一回にしよう」

「そんなご無体な！　これから毎日通うものだと思っていましたのに！」

「絶対にダメ。来る日も来る日もあんなのを十何杯も食べるなんて健康に悪影響すぎる。それにだな、間も置かずに毎週毎月どころか毎日食べてたらいずれ飽きるだろう？」

「むう……………ですが、」

「そこでオレは考えた。今日のこの日付を泰山記念日とし、無制限にあの店の麻婆豆腐を食べてよいことにするのはどうか、と……………」

「ここぞとばかりに畳み掛ける。」

泰山を年に一回と制限することにしたのは第一にマジアの身体を慮んばかつてのことなのだが、それ以外の個人的な理由もあったり

する。

「ま、その話はおいおいにしてだ。マジア、街に異常がないか確かめるぞ」

一人より二人。

オレ一人では気付けないものがあっても、マジアと二人がかりでやれば、単純ではあるが二倍の物事に気付くことができる。オレが探しているのは異変であって、異常ではないが、マジアが見つけた異常が思わぬ糸口になるかもしれないし、オレがうっかりをしてしまったときのフォローは必要だ。

……こうして、教会に着くまでずっと探したが、想定外の異変は無かった。敢えて言えば、凄まじい勢いで復興が進む新都とそのすぐ近くの、怨霊が蔓延る公園予定地は異常と言えば異常だったが、原作からの異変ではないはず。原作で四次の閉戦から五次の開戦までの記述はほとんどないから断言はできない。

「この時点で死んでいるはずの璃正神父が生存している。原作の思い込みは捨てるが吉だな」

手始めに言峰綺礼だ。

あのエセ神父は生きているのか、それとも死んでいるのか。死んだのならどのタイミングだったのか。良くも悪くも、あの神父の波紋は大きい。できれば詳細を知りたいところだけでも、父親に直接細々と聞き出すのは非礼だし心証も悪くなるだろう。

「鯉口を切るくらいのはさりげなさど、蛇行する川の流れのごとき婉曲さで、最低限の情報、つまり生存確認のみ抜き取るべきだろう」

教会の扉の前。

その取っ手を握りしめていた手は石化したかのように固まっていて、目前に迫った扉を開きたくなさそげだった。しかしいつまでも立ち止まってはいられない。いつだって時は誰も待つてくれやしないのだから。

「行くぞ——」

そう気合を入れた瞬間、ひとりでに扉が開いた。

「ほら、早く入りますよ」

マギアであった。

「なんだか、締まらないな！」

もたもたしていた自分が悪いことは分かっているけれども、それにしたつてため息の一つくらいは許されてもいいよなあ、とオレはドアの先にあるマリア像に心の中で問うのだった。

——九年前秋、言峰教会内—— 弟子入り！

「言峰教会へようこそ。儂がこの教会の神父を任されている言峰璃正だ。して、聖杯戦争が終わったいま、この教会に何のようかね。アインツベルン」

璃正神父は、オレとマギアが共に教会に踏み入れた直後に用件を問い質した。

心なしか青筋を立てているように見え、お父様たちはこの神父をしてそこまで怒らせるようなコトをしたのだろうかと疑問に思うが、そんなことよりも話を切り出すことにした。

「そうですね、実は特段の用事はありません。先程お会いした中華飯店泰山で不思議に思ったことがありましたので、それをただの興味本位で訊ねたいだけです」

「つまり、聖杯戦争に関わることではないと」

「ええ。第四次聖杯戦争もアインツベルンも何の関係もないことです」

「……………」

この沈黙は肯定と受け取っていいだろうと勝手ながら自己判断し、話を進める。

「自分の訊ねたいことはですね。厳しそうに顔を歪めながらも、なぜ貴方は麻婆豆腐を掬うレンゲを決して止めはしなかったのか、その動機です」

「……………美味しかったからだ。それ以外の動機などあるかね？」

「ええ。確か泰山の麻婆豆腐は、そういうえば息子さんの好物じゃありませんでしたか？　そこで、ふと同じものを食べてみたくなっただけれども、アレのあまりの辛さに顔を歪めた。しかし、残すことはでき

なかった。それは――」

ここまで言ってから、些か直戴だったかと後悔した。

さりげなく、かつ婉曲に訊くというのは思いのほか難しいよう
で、失敗してしまつたようだ。その証拠に、璃正神父自身は抑えよう
としているようだけれども、抑えきれない殺気が漏れている。

「もちろん無理にとは言いませんが。それと、もう一つ。相談したい、
というよりも頼みたいことがあるのです」

「……………」

「――私を、弟子にしてくださいませんか？」

瞬間、時間が止まつたように感じた。

頭を下げているので神父の表情は読めないが、驚愕に殺気が取つ
て代わられたことくらいは雰囲気から推測できた。

「……………それは、いったいどういう意味か
ね？」

絞り出すような声だった。

何度も頭の中で咀嚼したのだろう。しかしそれでもオレの意図
が掴めなかつたため、本当に言ったのかどうかすらも怪しくなって聞
き返したような声だ。

「つまり、衛宮生継を貴方の弟子にしてくださいという意味です」

「……………とりあえず、面を上げなさい」

言われるままに姿勢をただすと、困惑顔の璃正神父を眼下に取れ
た。

それは当然の反応だ。息子の敵の子供が、弟子にしてくれと頭を

下げて頼むなんて誰が予想できるだろうか。当の頼んだ本人にしたって、あの事件が無ければ言峰璃正から殺気を放たれた時点で教会から引いていたに違いないと確信を持って言えるくらいなのだから。

「どのようなにして、そのような突拍子もない考えに至ったのか。その理由を包み隠さず教えてくれないかね？」

「……………もう数カ月も前のことになりました。私と付き人のマギアは高山の麓にある小さな村に泊まっています。あいにく言葉は通じませんでした。あまりの衰弱で死にそうだった私たちに、体のみならず心まで温かくなるような食事や、寒い夜を凌げる寝床を与えてくれたりと、よそ者で見ず知らずの私たちに優しく接してくれた善良な人々でした——」

数々の天災が織り成す地獄を乗り越えた後の人の善意は身に染みた。

そう、極寒地獄での凍死脱落は何とか免れたが、あのYAMAはそれだけで終わる有象無象の山とはワケが違ったのである。噴火はもちろんのこと、落雷地震竜巻など多種多様な自然災害に遭った。

むろん黙って死を迎えるオレとマギアではない。まだ死ぬわけにいかないオレたちは、それら天変地異に果敢に対応した。ときには二人とも崖から飛び降りて火山ガスやマグマから逃れ、ときにはマギアが錬金術で避雷針を即席で作って落雷から逃れ、ときにはオレが刀と殴打で地震の衝撃で落下してきた岩石を割り砕くなどして逃れ、またときには上空へ巻き上げようとしてくる突風に対しては魔力放出で抗いながら逃れたりするなどして、際限無く訪れる数多の死地を乗り越えた。

……………そのうえ、一つ一つの天災がお行儀よく順番でまわってくるはずもなく。全部乗せという正気を試される事態が起きたけれどもそれは思い出したくもない記憶のため割愛する。

「——そして、あの事件は泊まって三日目の夜に何の前触れも

なく起こりました。それは、たった一人の死徒の仕業。ヤツによって、村にいた住人が時を追うごとにグルルと化していきました。そこは孤立した狭い村です。とっさに避難できる場所なんてありません。私とマジアはヤツラに応戦しましたが、住民を守りながら戦い抜くことはできず。それどころか、あの死徒には、傷ひとつ付けることさえ能わず。せめて、私たちもグルルにならないようにと防戦で手一杯でした」

………違う。あれは防戦とすら呼べない有り様だった。こちらの攻撃は例外なく弾かれ、ヤツの、まるで痛め付けることに特化したかのような攻撃だけが容易に通ったあの様は、あまりにも一方的だったのだ。あのままヤツに対して二人で抵抗していたら、まず間違はなくオレたちは此処にいなかったと確信できるほどに。

その世界線の自分たちはグルルになっていたか、あるいは死徒の一員になっていたか。ひよつとしたら変わり果てた姿で、ここ冬木市を襲っていたかもしれない。

———や、それはないだろうな。だってもし、自分たちがそういうモノに成り下がっていたら、きつとあの麓の村で彼女に殺されていただろうから。

………ま、この世界線でも危うく殺されそうになったんだけどな！　オレが生き延びたのは、殺害の優先順位がヤツよりも下だったからなわけだし。てか、彼女は知ってるサーヴァントの能力を多用してたし、ひよつとしたら、聖杯戦争に関わっている死徒やもしれん。もしかすると、第五次聖杯戦争に参戦するやも。

………うわ、それは最悪だ。

原作には存在しない予測不可能のイレギュラーが死徒で敵対していて、しかもサーヴァント以上に強いとか誰得だよ———想定したくない可能性だから無視しておこ。

「………が、抵抗むなしく、ついに私たちは袋小路に追い込まれました。いま思えば、ヤツにとって、あれは狩りに過ぎなかったのですよ

う。私たちはネズミでヤツは蛇。私たちとヤツは、そのような絶対的な食物連鎖の中にいた。

なのに、いや、だからこそヤツは、普通の蛇のように獲物を一撃で仕留めようとしなかった。どのようにネズミを死なない程度にいたぶって、そして、最期にどれだけ絶望させられるかを追求していた。過程に比重を置いて、結果に眼を向けようとしなかった。だからこそ、蛇は鷹に狩られた」

要は獲物にばかり関心を向けて、ヤツはヤツを狙う上位者に気付いていなかったのだ。足元を掬われるのではなく、頭上から首を持つていかれた。同じ慢心でも人それぞれ殺られ方が違うのである。

「自分は、もつとずっと強くならないといけないんです。他人の手を借りずともヤツに勝てるぐらいに強く。じゃないと………」

また、何も果たせぬまま死んでしまう。

姉さんは死なせない。

マジアも死なせたくない。

聖杯は破壊しなければならぬ。

3つの試練をできるだけ早く踏破して、彼女が待っている病院に駆けつけなくてはならない。

上手くスピーディーに革命を成功させて、あの弱りきった国を諸外国や新たな勢力に対抗できるだけの強国にしないといけないのに

「———そうだ。オレは、まだ死ねない。死ぬことは許されない。そのために力がある。守りたい人を護れ、自分自身も護れ、敵対するヤツは直ちに葬れるだけの力が必要だ。だから、言峰神父。オレを鍛えてください。雑用でも何でもします。ですから———」

もう一度頭を下げ、教えを乞う。こうなったらプライドのバー

ゲンセールだ。一日に二度も頭を下げるなんて人生初。これでも断られたらこれまた人生初の土下座も考えようと思う――！

――そうして、暫くの時が経ち。

「――いいだろう。ただし、儂の鍛練は生半可の覚悟で耐えられるものではない」

「……………」

「そうだと知って、なお儂の弟子になりたいのであれば、明日のこの間に、また此処に来なさい」

「……………」 わかりました、恩に着ます！」

やった、許可が降りた！

じゃあ今日のところは帰っていいって合図も受け取ったし、幼年度の影響なのかハンパなく眠いのでとっと帰ってしまおう！

「ありがとうございます神父。よし帰ろうマギア。遅いし直接タクシーでさ」

「承知しました。それと弟子の件ですが。私は大旦那様よりお坊っちゃんへの魔術の教授を頼まれています。ここまで述べれば、私の言いたいことは分かりますね？」

「魔術の担当はマギア。格闘は璃正さん担当ってことだろ？」

「ええ。くれぐれも、私以外の方から魔術を教わらないよう」

なんだか、マギアがこうして念を押す姿に、原作とのデジャブを感じるような？

……………まあ、いいか。気にしないでおこう。

遠坂凜との接触が上手くいったら、彼女からも詳しく魔術に関して聞きだしたい。これは、複数人から知識を得ることで整合性を取るためだ。

「それと、もうそろそろ私を略さないで本名で呼んでもよい頃と思うのですが」

「すまない聞こえなかった。もっと大きな声で」

「……………その手には、もう乗りませんよ。アインツベルンの付き人たるものは優雅たれうんぬんと延々に説かれるのは、もうこりごりですから」

「む、そうか」

おおマガアよ、その予測はハチミツと生クリームとバニラアイス
をふんだんに乗せたフレンチトーストよりも甘い。

蓄積された経験から学習したようだが、そのような態度だと、このままもずっとマガアと略称で呼ばれることであろう。

三年前から始めた、オレがマガアの本名を略さずに三回言うかどうかの賭け。油断しなければ、このまま勝ち逃げできそうだな。

——さて。マガアはいつの日か、オレに本名を言わせられる日が来るのか。

とうーびーこんていにゆーど。続く。

——五年前春、入学式前日—— 鋼の信仰心

璃正神父の信仰心はとても厚い。

死徒どもを滅ぼす力を身につけるためにヤツラの天敵である聖堂教会の代行者を目指したいと言ったら、あれよあれよといううちに入信させられていた。その後は来る日も来る日も熱心に説法されて、いつの間にか聖典を理解するに留まらず一言一句暗記しようとしている自分がいて、これに気付いたときは思わず絶句したものだ。

「——どうかお考え直してください。裏切り者の邸宅に泊まるなど、お館様が聞けばどれほど嘆くことか……！」

日没前まではマジアから魔術の講義を受け、日没後は言峰璃正から説法ときどき八極拳の手ほどきを受ける。弟子入りしてからの約四年間は、そんな日々が続いた。

「決めたことだ。お父様はあの邸にはもういないからいいじゃないか。それに一度取り決めた約束を反故にすることはできない」

入学式の前日の今日までは。

学校に入ることにマジアは大いに反対した。何も通学所要時間の関係で衛宮邸に泊まることになったことだけを嫌ったのではない。学校に通うことで、魔術の鍛練時間が激減してしまうのを防ぎたいのであろう。

………果たしてマジアの不評を買ってまで、学校に行きたいワケは2つある。

一つ。聖杯戦争に万全の状態で挑むためには、他のマスターからの信頼を得るべきと考えているからだ。騙し討ちは狙っていない。基本は正々堂々と戦う。

二つ。情報収集。最近は原作との食い違いを見つけられないの

で情報網を拡げる必要がある、と強く感じたためである。

「そんなに嫌ならマギアは城に居てもいいよ。あの家にはオレ一人で行くからさ」

「……………ええ、わかりました。わかりましたとも。私はアインツベルンのメイドです。あれこれ口を挟ませて頂きますが、すでに決定したことにケチを付けるほど礼を逸してはおりません。ただし、一つだけ条件があります」

「条件？　あんまり無茶なのは勘弁な」

「ええ、もちろんですとも。お坊ちやまにとつても、そう悪い話ではないと思いますよ？」

うわ。

どつかで同じようなセリフ聞いたことあるぞ。確か、傭兵のアイツがたまに溢してた愚痴の中にそんなのがあったような。

嫌味ったらしくて慇懃無礼。その癖、仕事はちゃんとこなしているから文句がいえぬ苦手なヤツだったとか言ってたっけな。

「了解。で、その条件とは？」

「私に——」

……………げ。

そんなコトされたら、戦術戦略のどちらも建て直さないといけなくなる。しかし、了解と言った手前、話をまったくの白紙に戻すことはできない。

ああ、もうどうしたら——！

「ご心配なさらずともオールオツケーです。アインツベルンの名に懸けて、必ずやパーフェクトな一級品を『自力』で見つけ出してご覧にいられてみせましょう」

メラメラと瞳の炎が燃え上がっていらっしやる。

こうなったら、なるようになるさ精神だ。マギアのやる気に任せてしまえ。オールオツケーとか自力とか、そんな失敗フラグっぽいのは知らない。聞かなかったことにするんだ！

マギアはできる子！

マギアはできる子！

マギアはできる子！

「よし。ファイトだマギア。オレこれから教会。途中までクルマよろしく」

……あ、そういやオレって、最初の半年間しか中学に通ってない。高校には最高学年のみ。そんなだから修学旅行とか体験したことないし。上海とか中東とかレイブン・ロックとかの危険地帯を銃と刀を頼りに渡り歩く、毎日がデンジャラスな海外旅行三昧だったけどな！H A H A H A！

——ん？

——んん？

——んんん？

いま、重要なことを思い出したような。

……ああつ、そうだ！

「そうだ、忘れてた。銃器の取り寄せてできるか？ 超遠距離用

の狙撃銃と牽制用のハンドガンがある。狙撃銃は嵩張ってもいいから、威力と命中補正の高い対物ライフルにしてくれ。拳銃は、耐久性が高ければ何でもいい。照準は自力で何とかできるから。あとは——

——

「少し待ってください！ いきなり一度に捲し立てられても解りませんから。後で——」

「わかってる。」

ついヒートアップしてしまった。

こっちに来てからずっと、何か足りない気がしていたのだ。喩えるなら心に空白が出来て、そこにヒューヒューとからっ風が吹いているような、そんな物寂しい感覚。

が、とうとうオレにも春が来た。長い秋冬のシーズンは、戻ってくる最後のパズルピース即ち重火器の存在により、恒久的心外退去を命じられたのである。

で、長い越冬期を凌いだ今、気分は秋晴れの清々しい青空のよう

に、いや、春の訪れに伴い、つぼみがポンと薄紅色の花を咲かせるさまを目にしたかのように、穏やかながらも心踊る心境だ。

そして、そういう晴れやかな想いは、身のまわりの誰かにお裾分けしたいものである。

「夕食、まだ食べてなかったな。久々に泰山で食事しないか？」

「ええ、そうですね——すみませんもう一度仰ってください」

「おうよ。久々に泰山で食べないか？」

「!!!」

「ちよつ、ブレーキ、ブレーキして！　めっちゃスピニングしてるからあ

！　木、木にぶつかってえう！　がっ！　ぐゲがあッ！

ズッ！」

いっつう………舌噛んじまった。

シートベルトをちゃんと締めていたことだけが幸いか。あつちで身体を乱舞させられていたら、もっと酷いことになっていただろう。

………体の節々から星を出しながら、やつとの思いで座席を掴んだ沖田総生改め衛宮生継。胃の中の内容物を吐きそうな彼だが、そこはアインツベルンのご令息。どんなに無様であっても、貴族の一員としての体面は保つ。

喉まで込み上げてくるモノを懸命に飲みほし、引きつった笑みを浮かべる。彼に言わせれば、この程度はどうということはないのだ。彼は知っている。

ガタが来たうえに攻撃を受けている状態の戦車の乗り心地の最悪さを。

爆撃機からの爆撃を受けて破損寸前となった戦艦の揺れ具合の酷さを。

大地や山脈に向けて加速度的に墜落していく飛行機の圧の凄まじさを。

——さて。繰り返しになるけれども、この程度のことならば彼にとって日常茶飯事。何の問題も無いのだ。むしろアハト翁の

施術の影響で前世の全盛期よりも身体が丈夫になっているため、痛覚はあれども怪我はなくてピンピンしていたりする。

……しかし、この広い世の中には合わせ技と云うものがある。それは時に予想外の結果をもたらすことでも知られるが、下車後の彼に起こったことも一つの好例として押さえられる——！

「(……………危なかった)」

危うく、亡きアイリスフィールとマギアお気に入りのお大事な車を汚してしまうところだった。

最初の勢いのままに運転されていたら吐く危険性もあったけれど、公道に入ってから徐々に落ちつきが戻ってきたので何とか耐えた。それでも若干暴走気味な運転だったために、住宅街を爆走していたときは別の意味でヒヤヒヤしたものだ。さすが最高時速270キロメートルのメルセデスなんかクーペ。まるで人払いの結界が張られているかのように人通りが皆無だったから助かったが、もしそうでなかったら、あまりのスピードにブレーキが間に合わず、人の一人や二人は命を落としていたと思う。

「マー中のマギアにあんな事を言ったオレも迂闊だったけどさ。はあ、よく反省しろよ?」

「次はないように最大限の努力を致します。本当に、申し訳ございませんでした……………!」

くれぐれも再発防止に努めてほしいものだ。

……………うぶ、気持ちわる。このお腹のあたりがムカムカとする不快感は小一時間は消えないとみた。

こんなバッドステータスを持ったまま、基本的に油っぽい中華料理を食すのにとても不安を感じるが、マギアには行くと言ってしまったので、行く選択肢しかない。

——泰山前に立つ。

錯覚か、漂ってくる刺激臭。

う。胃の辺りが気持ち悪いし痛い……………。

「よし。マギア、行くぞって何だそれ？」

「オーダーメイドの花山椒でございます。今日はマーボードーフ以外も頂きたい所存ですので、物足りなかったときのように持つて参りました」

「ああ、そう……………」

マギアのレベルは知らぬ間に上がっていた。

というかそんなものを持ち歩いてるなんて、どこかの育ちの悪い毒舌シスター様と属性が被るのではないかと元辛党は愚考しまし
てよ。

…………ま、それはそれとして。上品な薄味派に鞍替えしたオレは、
軽い気持ちで赤い扉まで進んだ。すると、珍しいことに白い張り紙が
貼られてあった。

「……………」

「む……………」

それぞれ、その張り紙を覗きこむ。

「…………ちっ」

「ふーん…………やるなあー！」

マギアは現実を直視したくないと思考停止し。

生継は————実にイキイキしていた。

一体全体、この二人の反応の落差はなぜ起きたのか。答えは明白
である。

「全国麻婆大食い対決地区予選にて麻婆豆腐を提供する担当になり
ましたアルので、一週間休業させていただきますアルヨ」

へえー、アルアル店長やるじゃん。

おっと、近くに貼られた茶封筒には大会のパンフレットが置いて
あるようだ。

……………ふむ。大会日時は明日の午前9時。場所は冬木市市民
ホール跡地の公園。開始時間までになら飛び込み参加可、か。

オレには関係のないことのようにだが、マギアは参加したいと言
い出すかもしれない。チラリと横を見ると、ちょうど目が合った。

どうやら参加するかしまいか逡巡している様子。背中を押して

やるには、その葛藤しているわけを取り除くべきだろう。

「これに、出場したいのか？」

「……………」

「したくないなら聞き流してくれて構わないんだけど。もし参加するんなら、そのメイド服以外の格好にしてくれ。目立つから」

「…………なるほど。その手がありましたか」

ビンゴ。

「普通の服で出れば、アインツベルンの名に恥を塗ることはないだろう？」

「感謝します、お坊ちやま。……………それで、庶民の服とはどこで買えばよいのでしょうか？」

「え？ 分かんないけど、商店街のどこかに服屋があるんじゃない、たぶん」

原作を思い返す。

新都にあるデパートの二階に、服を売る店があつたような。いや、果たしてデパートかどうかは定かではないが。

最近では建設ラツシユから開店ラツシユに移行したし、商店街の服屋を手探りで探すよりも、新都に行つて適当に見繕つてしまう方が、開店セールもあつて、お得で質の良いものが買えていいかもしれない。何より通り道だし。

「いや、新都に行こう。きっと似合う服があるはずだ」

璃正神父との特訓まであと一時間しかない。

残念ながら、マギアで服の着せ替えをしている時間はないようだ。

……………ま。誰にも見られていないほうが、気楽に選べていいだろう。

「マギア？」

チリーンと呼び鈴を鳴らしていた。

んー、今日は休業つて判つているよねチミ。にも関わらず人を呼

び出すってどういうこっちゃ。

「——アイ、少し待っててアルー！」

奥のほうから、アルアル店主の元気な声が聞こえてくる。オレはマギアから距離をとって、動向を見守ることにした。

「オヤ、マーギアちゃんアルね。どうしたアルか？ 今日休業

日アルよ」

「この前、『いつでも遊びに来るネ！』と仰っていました。ですので、来たままでですが」

やはり迷惑でしょうか、と膝を曲げ、チビツ子店長を上目使いで見るとマギア。

「というか、名前覚えられてる………！ しかもプライベートの関係があるっぽい………！」

おかしいな、ここにマギアと共に来店した回数はそう多くはなかったはず。はは、こやつめ。オレの眼を盗んで密かに通っていたな？

そんな疑いの眼差しを無視して、会話はどんどん重ねられていく。

「——さすがは魅^{ほつ}さんです。本大会も担当されるのですか」

「さつきからマーギアちゃん誉めすぎアルヨ。東京なんて遠くて別に行きたくないアル」

「東京はお嫌いですか？」

「嫌いとは言っていないアル！ 初の晴れ舞台アルから緊張するだけ

ネ」

「応援していますよ。………おや、服がいつもと違いますね」

「気が付いたアルか？ 赤と黒をベースにした、勝負衣装アル！」

「おおー、と歓声を上げるお二人さん。」

彼女らの趣味や嗜好が似たり寄ったりで、性格も合っているせいか、雑談は途切れなさそうだ。

「………特訓まで二十分しかない。もう行こう。」

「マギア、教会に行ってく——」

「待ってください！」

「待つアルよ！」

「……………なんでや……………」

「マーボードーフを食べてから（アル）！」

「……………げ、既に了解取れたの？」

「この四十分の待ち時間は、いったい……………」

「ええ。さあ、参りましょう」

「大会用特製マーボードーフ作って待つたアルから、冷めない内に食べるヨロシ」

まるで喉を痛めたかのような錯覚を引き起こさせる匂いを漂わせる店内に、両腕を掴まれて問答無用で引き摺られていく。

助けてくれ、誰か。もう、数カ月間も流動食のみしか消化器官が受け付けられない食生活をするのはイヤなんだ……………！！

が、フィクション作品じゃあるまいし、このタイミングで都合良くオレを救ってくれるヒーローなんているはずない。なら、オレを救える人間は己しかない。

「……………っ、分かった、食べるよ。けど半皿分の量だけな。あと十五分で教会に着かないといけないんだ」

「十五分で教会アルか!? それは仕方ないアルな」

そう言って再び厨房から戻ってきたロリアル店主の右手と左手にはそれぞれ、二人前の麻婆豆腐と半人前の麻婆豆腐が一つずつあった。……………尤も、其は半人前の量と云えども只の麻婆豆腐に非ず。

地獄の釜で煮詰めたかが如く黒い虚無の海。

埋め尽くす赤の墓標は一切の深淵を見せず。

星の粒子は様々な要素と結合し天をも焼く。

其は冥界であり。

其は黄泉路へと導く羅針盤でもある。

然らば、その正体は……………

「……………、っ、馳走さまでした」

死闘だった。

車酔いが、まさかここで響いてくるとは。

今は何よりも——胃もたれがキツイ。

「あと10分。厳しい……………」

ま、成るようになるさ。

舌が串刺しにされるような辛さに唇と喉と胃も傷んでいるが、魔力を流せばすぐに修復されるであろう。『再生』と『接合』の起源は伊達じゃない。

「マギア。トランクの鍵、借りる」

トランクには、スペアの車輪の換わりに折り畳み式自転車が入っている。それを『強化』で全体的に性能を上げて頑丈にし、『魔力放出』で向かい風を無効化すればスピードはかなりのものになる。

……………そう、このように、

「ふ、ふはははははは!! エンジンの性能がどれほど良かろうと所詮は全て機械頼りの四輪車。乗用車風情が魔力放出ジェットエンジン付き折り畳み式魔改造自転車に勝とうなど、つくづく嗤わせものであるなあ！」

はっはっは、控えよれい下郎！」

煩わしいクラクションの鳴り響く車道を、一陣の風となって、ときに乗用車よりもバイクよりも速く、駆け抜けることも出来るのだ！

……………もちろんそれらに『強化』と『魔力放出』をちゃんと上乘せすれば、大迷惑な走り屋と化した魔改造自転車よりも遙かに速く走れる。さらに、乗用車らは速度違反でキップを切られないために遅くしているのであって、本気になれば魔力放出付き魔改造自転車よりも速いのだが、それは、自身の漕ぐ自転車の速さが一定以上に達すると自動的にハイテンションになってしまうほどの自転車愛好家には野暮と謂うものだ。

「くうっ、やっぱ自転車は最高だぜい！」

景色があつというまに移り変わっていく、イコールめっちゃ速い！

とても愉しくてたまらない。

……が、一つ不満がある。それは、魔力放出のために正面からの“風”を感じられないこと。今は急ぎの所用があるので是非もなしなのだけれど、なんだかなあ、となる。

「――よしつ。間に合った！」

教会前に停める。

盗難防止の鍵掛けは忘れない。

魔力の大部分は“魔力放出”に消えたので“強化”は解除し、身の身体能力で扉まで走って、そのままの勢いで内部に飛び込んだ。

「こんばんはー！」

「こんばんは。」

……今日も元気があってよろしいが、君も力が強くなってきているのだから、周りの物に気を遣うようにしなさい」

「あ……、すみません」

扉には亀裂が入っていた。

おかしい、今のは素の力だったはず。いや、もしかしたら無意識に“魔力放出”や“強化”を使っていたのかもしれない。以後気を付けないと。

「それで、今日は何を？」

「フム。君には今まで聖典についてや中華拳法を教えてきたが、とても物覚えが良い。まるで息子の……、すまない、忘れてくれ」

「はい」

「ありがとう。……そこで、だ。今日から新たなステップに入ってもらおうかと考えている。判るな？」

「黒鍵、ですか？」

「そうだ。儂の体は、この年のせいか日に日に衰えてきていてな。それ故に八極拳を教えることはもうできぬ」

聖杯戦争の監督役もなと自嘲し、背を向けた。

微かに哀愁を感じる背中だった。

「聖堂だ。そこに、黒鍵と的を用意した。最初は儂が手本を見せる。最初は見よう見まねでやるのだ」

「押忍！　了解であります、師匠！」

ビシツと敬礼し、璃正師匠に着いていく。

……………ふと、カレラを思い出した。

半死半生のコドモたち。

原作では衛宮士郎と運命を違えたヒトらは、この世界線では、いったいどこで何をしているのか？

この教会の最奥で、あるいは他の場所で、養分にされていないことを祈ろう——！

——五年前春、入学式当日—— イレギュラーズ

ジリジリと喧しいアラームの音で目が覚めた。

時刻はきっかり5時30分。両頬を思いつきりビンタして睡眠欲をシャツトアウト、城から持ってきたシックなパジャマから凡庸な学生服に着替える。

そうして、ふと自分の部屋を見渡すと、つまらなげに眩きたくなかった。

「……………こうして見ると、何も無い部屋だなあ」

ここは衛宮邸の一室。

私物は一振りの刀と、一冊の本しかない。

服などの生活必需品や学校の教材は、敷居を隔てた隣の部屋に、ひとまず置いてある。

……………しかし、この空虚さは何だろうか。何かが足りないと思う感覚。既視感と違和感が同居している感覚。

顎に手をあててしばらく頭を捻っていると、天啓のように鮮明なイメージが脳裏に浮かび上がってきた。

それにしても、この和室は前世で一時期住んでいた部屋によく似ている。

充満する井草の香りや、ピシヤリと閉まる障子に襖、極めつけに、畳を返すと現れる地下のスペースも。いや、最後のはハンドガンとそのセットの弾薬が入れるか入れないか程度の物置きでしかないから、その再現度はまだまだか。今度専門の人を呼んで、この畳みの下に大きな地下室を作ってもらおう。そうなれば、たくさんの結界や謹製のトラップを仕掛けられる、第二の魔術工房秘密基地が手に入る。

ぐへへ。オラわくわくすつぞ！

「へへへへへ。……………はっ、いかん漏れている。アインツベルンたるもの常に優雅たれ、渴！」

爪を掌に食い込ませて渴を入れる。

くつくつと一人で笑っている現場を誰かに目撃されたら、これか

ら築き上げる予定のミスターパーフェクトな衛宮生継像は一発で瓦解だ。絶対にそうならないよう、学校にいるときは気を張ってないと。

「さて、衛宮士郎の朝ごはんはどんな具合か」

彼の得意は和食だったか。

アニメ化されたUBWで描かれた、天ぷらや鮭の照り焼きは実に美味しそうであったので期待値は高い。

……で、他の衛宮邸メンバーは洋食と中華とお好み焼き丼。これらとの被りは防ぎたいから、オレは自動的にカレー系統を担当することになる。その日がとっても楽しみだ。

……居間である。

洗面所で洗顔し道場で習慣の素振りをしてから、周辺に朝ごはんの匂いを漂わせる現場に来了。白米と味噌汁は基の一として、焼き物おひたし卵焼きなどの典型的な和食がお皿に盛り付けられていく。

「おはよう衛宮士郎、配膳手伝うよ」

「サンキュ。他の朝飯の支度はできてるから、終わり次第休んでくれていいぞ。お茶の用意してあるから」

確かにテーブルには、ポットや急須、お茶請け等が用意されていた。周到である。こういう気が利くところも女性に好かれるポイントなのかもしれない。

そう反省しつつ、配膳を終えて寛いでいると。

「おっはよー！　今朝もいい匂いさせてて、結構結構！　それと来る途中に合流したんだけど、このメイドさんっぽい人は誰かなー？」

「……………」

冬木の虎こと藤村大河とマギアがやってきた。

その虎の齢は二十。まだ大学生である。

これまでフェイト七不思議の一つであった、ゼツちゃんから教師藤村大河への成長過程。我々はついに真実を知ることとなる――

「ああ、マージアさんは昨日からうちに泊まることになったんだ。

切継の実子の生継の付き人だとかなんとか。昨日のかなり遅くに来たから、藤ねえには紹介できてなかったな」

「へー、そうなの。切継さんの、実子さんの、生継さんの、付き人さんなのねー」

ふーんと頷き、急須からお茶を注いでゴクリと飲みほす藤村タイガ。あ、ちなみに冬木の虎・大学生バージンは教師よりの容姿でした。

「——つて、え、実子つて………ホント？」

「ああ。ホントも何もこの居間に居るぞ。俺の見間違いないやなきや、藤ねえの横に座っているはずだ」

「………あれ、うそ、気付けなかった………ひよつとして貴方、忍者の末裔？」

「残念ながら、オレは伊賀者でも甲賀者でもなく衛宮生継という者です。父がよくお世話になりました」

「い、いえ！ よくお世話になってもらったのはこちらの方です！ もう感謝してもしてもしきれないくらいに！」

「そうですか。………では、ひとまず今日からこの家に住むことになったので、よろしくお願いします」

「ええ、こちらこそ」

よし、これで正式に衛宮邸の住民権獲得つと。

これによって、もし仮にアインツベルン城に居られなくなっても行き場がなくなるわけじゃなくなる。

「「いただきます」」

挨拶の声が重なりあう。

四人が同じ食卓を賑やかに囲い、同じ食事を黙々と食らうさまは平穩そのものだ。

「土郎、おかわり」

「はいよ。そういや、藤ねえは入学式に同行してくれて本当にいいのか？ 大学に間に合わないだろ」

「別にいいのよー、授業を一つ欠席するくらい。私は大学生である前に土郎の監督役なんだから」

「……なるほど。監督役たる者はニユウガクシキに行かなければならないのですか」

「そうだマーギアさん。あなたもどう、入学式。生継くんは士郎とは別々の学校だから、それじゃ一人で登校することになるじゃない？」

「オレは一人でもい——」

「それはちょうど渡りに舟のお話ですね。大会までの時間をどうしようかと考えていましたので。まあ、本人が嫌なのであれば取り止めますが」

「——いんだけど。マギアが行きたいならそれでいい。けど来るなら、メイド服は目立つから止めろよ」

「承知しました」

「ならばよし。ぐちそうさま」

食器を片す。洗いはしなくていいとのこと。

マギアの準備が終わるまで、気紛れに魔力放出の実験をしながら中庭で待つ。

ちなみにこの実験の目標はフィンの一撃以上の威力を魔力放出で再現すること。そしてその最終目標は、サーヴァントとの高速戦闘中にも自在に使える魔弾の完成である。

狙いは土蔵の強化した壁。あれを穿つほどのものになれば、対魔力なしのサーヴァントにすら通じる弾丸として戦闘に実用化できる。もっとも、呪いを帯びさせることはできない。再現は威力だけだ。

「朝から精が出ますね」

「あと五年だからな。それまでにサーヴァントと戦えるくらいになつておかないと、な！」

イメージは卓球。

ラケットは手のひらで、球は風か炎の弾丸。

フォーム。体重の乗せ方。腰のひねり。

それら肉体的な要素と、魔術的な要素が巧く合致したときにだけ成功し、さらにそれはコンマ一秒未満の動作にしなくてはならない。実戦に使えないからだ。

「…………ちつ、分散したか」

強化された壁に小さな陥没が5つ。

この程度の威力では、生身の人間はともかくサーヴァントに対しては牽制にもならないだろう。

《強化》の要領で《再生》の魔術を土蔵に施してから玄関に向かうと、そこには靴を履いている最中の衛宮士郎がいた。

この家に住むにあたって気がかりなことを、ちようど良いタイミングだし訊くことにした。

「衛宮士郎、ここの戸締まりは任せていいのか？」

「ああ、今日のところはな。でもこれからは合鍵を渡しておくから、最初に来たときのと最後になったときのとをよろしく頼む」

「あいよ。任された」

これで奇襲も避難も幾分か容易になった。

今日も良い一日になりそうでありよりである。

「そういや、マギアはオレの居ない間はずっと暇になるよな？」

「今日は麻婆豆腐大食い大会があります。ですが、長い目で見れば、私は退屈をもて余していることになるでしょう」

「よし。ならば君にはあるプロジェクトを任せたいと思う。それはだな——」

「——それは、ええ、不可能なわけではありませんが…………」

「ならやる、いいね？」

「わ、わかりました。大会の終わり次第、すぐに」

今日は本当に良い日だ。

昨日の災難の跳ねっ返りだかしらんが、運がオレに向いてきている。そんな気がする。

「大会も、頑張れよ」

「ええ」

それっきり会話はなくなった。

マギアは、さきの丸投げにしたプロジェクトについて難儀しているのかぶつぶつと一人言をずっと呟いていて、オレはそんな彼女の思考の邪魔をしないようにずっと黙っているといった具合だ。

学校までの距離は遠くない。歩いて十五分程度といったところ。その程度の時ならば、沈黙が降りていても耐えられる。

「……………ふーん。親子連れって、こっちの世界では結構な数いるんだな)」

まったく羨ましいかぎりだ。

うちの身内の大人といったら前世も現世も早死にか行方不明ばかりで、物心ついた頃には遠い存在になっていたものだ。もっと係わりが長かったのなら、剣技や魔術について、直接詳しく教わることできたろうに、残念でならない。

「……………お坊っちゃま、どうやら目的地に着いたようです」

「ああ、そのようだな。ふむ。保護……………監督役はあそこの受付で受付を済ませば、入学式に列席できるらしい。オレは自分の教室に行ってるから、マギアは受付の指示に従ってくれ」

「了解しました。それと、この送り迎えは毎日行ったほうが良いのでしょうか」

「絶対に、止、め、て、く、れ。これは入学式だけのことだからな?」
「御意に」

幼稚園生なら保護者同伴は解るが、中学生にもなってそれはない。んま、なにはともあれ判ってもらってなりよりである。

「(さてと。自分のクラスを確認して、まずはその教室に行くんだっけな)」

大勢の新生者が群がる掲示板に、人の波をかき分けて向かう。A4サイズの紙の用紙だった。

沖田沖田……………いや、今は衛宮か。

クラスは……………A、二階。

下駄箱で革靴から上履きに履き替えて、指定された場所へ。木目状の階段を登り、廊下は向かい側の教室なので比較的長く歩いて教室に着いた。

黒板ならぬ白板に表示されている座席に座る。廊下側で前から四番目の席だ。現世においても窓側には縁がないらしい。

既に半数以上は己の席にいた。二人を除いて殆どが知らない人

間だ。

「(遠坂凜に、寺の子。おそらく同じ学校だろうと思っていたが、クラスまで同じだとはな)」

ううむ、寺の子。なんて名前だっけなあいつ。 桐洞寺の……：……：……
そうだ、そう、桐洞一成。

——いけない傾向だ。時が経つにつれて前世の記憶が消えてきている。対処法はない。いや、あるにはあるが、それは定期的に昔を思い出すことだけ。完全に磨耗を止めることはできない。

「(……：……来たか)」

階段から一列に並んだ複数人の気配。

生徒は数名以外は席にいる。なら、彼らは各クラスを担当する担任教師に違いないだろう。

気配は各クラスのドアの前で別れて、最終的にその気配は一人になった。今度は足音の情報もあるのでそれは確実だ。

スライド式のドア。

これを開いて教室内に入ってきたのは、若々しさに溢れ、同時に疲労感を否応なく感じさせる、一人の人間だった。

「皆さん、まずはこの一年間宜しくお願いします。詳しい自己紹介などは後々にしますが、名前だけはこの場で名乗っておきたいと思いません」

まだ歳は三十代半ばほどか。

にもかかわらず、彼は白髪だった。それが彼の見た目年齢をさらに引き上げるのだが、疲労感のほかにも充実感や達成感も感じさせるので、誰しも彼に対しては不思議な印象を持つだろう。

オレも、そのような彼に対してその印象を持った人間の一人であるが、名前を聞いた瞬間、ああと納得できた。

「私の名前は間桐雁夜といいます。皆さんと同じで、この中学校に入って一年目です。わからないことがあるときは、お互いに助けあつていきましょう」

話が終わるとともに隣のクラスにも聞こえんばかりの拍手が沸き起こる。それはいいとして。

なんであの男が生きている。

執念と憎悪で聖杯戦争に身を投じ、結果自滅したはずの男が、なぜ……………?」

「(言峰綺礼の死のバタフライエフェクト。だが、その影響だけで生き延びられるほど聖杯戦争は甘くない。

いったい、第四次で何が起きた……………?)」

前世でのヤツの言葉を借りれば、これは特大のイレギュラーだ。イレギュラーが猛威を奮ったのだ。

一番の候補は……………五年前のあいつか。オレたちを死徒から守ったあいつ。死徒を圧倒的な力で撃滅したあいつ。あいつが第五次にも参加するとしたら……………、勝率は大幅に減る。

「(厄介な。できれば敵にたくないが……………)」

敵になるのならば、恩人だろうが殺す。そうやって生きてきた。その生き方がオレを殺したのかもしれない。けれども、それを変えようとは思わない。否、できない。なぜなら——、

「……………ふん。そんなのどうでもいい。オレは、本番までに牙を、誰でも食い殺せるくらいに磨いでおくことだけを考えれば、それでいい)」

ふと、気が付いた。

「お坊っちゃん、どうかなさいましたか? やはり麻婆豆腐はお腹に響きますか?」

目の前には心配そうな表情のマギアがいた。

そして、ここは、さつきまで居たはずの教室ではなく賑やかな商店街だ。教室から商店街まで来た経緯を思い出せない。数分前の記憶すら思い返せない。

戦慄する。

あの刀を持っていないときに、あの症状が現れた。これは、マズい。何が原因なのか、早急に突き止める必要がある。

「なあ、マギア。オレは何をやっていた?」

言った、直後。

マギアは脳髓目掛けて殴りかかってきた!

もちろん、正当な理由がない攻撃を甘んじるオレではない。ここが人通りの多い商店街ということもあるので、背負い投げではなく、降り下ろされてくる《強化》された拳を、手のひらで包み込んだ。「マジアくん。これはどういうことかな？」

「ついさっきのあなたにこう言われたのですよ。『これから偽者の人格が表面に出てくるから、気を付けたほうがいい。このような質問をしてきたら十中八九偽者だから殴り飛ばしてやるように』とね。半信半疑でしたが、本当だったようですね！」

「へー…………、そう、ふーん……………」

偽者の人格、ねえ。

面白いことを言うじゃないか、そいつ。

てめえが偽物のくせしてよお。

くひやは、上等だ。その喧嘩、買おうじゃないか。

必ずやその偽物の人格を、ぶっ潰してやる。

「お坊っちゃん、眼が……………」

恐怖、いや驚愕か。

どうやら眼がどうにかなったらしい。

「……………うん？ ああ、なんだ、コイツラは？」

人の往来が盛んな住宅街。

だが、そのなかには、眼がどうにかなる前は視えなかったナニカが混じっていた。それは、まるで亡霊のような。

「……………っー！」

ふと、背後に強大ななにかの気配を感じた。後ろを振り返るが、そこにはだれもいない。けれども、依然として背中になにかがいるような。

そこで首を斜め下に傾けて、真後ろまで視界の範疇とすると……………白いものがいた。それは裂けた口で壊れたように笑って、嗤って、笑って、最後に、愛しい人に歌うような口ぶりで言の葉を紡ぐ。「アハッ、ついに見つかっちゃった☆ うふっ、やつぱり、まずは自己紹介からかなあーソーキくん♪ アハハハハッ！」

そいつは幼女の容姿をしていた。

全体的にファンシーな服装とその儂げな見た目も相まって弱そうに見えるが、それらのファクターはオレを騙すためのフェイク。

存在値、霊格の強さがビシビシと伝わってくる。それもその筈。ざっと三万人の魂の質量。それが強大でないはずがない。

「ああ、そうしてくれると助かる。どうも、自分が建てた推測が合っているかどうか不安でね)」

「(そう殺意マシマシにしないでよおー。ほら、商店街のみんなも怖がってるじゃないよ。そういう負のオーラは、抑えてー抑えてー抑えるんだぞ☆)」

「(ほほーう。負のエネルギーの塊の残留思念風情が言うと言得力があるなあ。それと、だれのせいでオレがここまで苛立っているかもわからないのか?)」

「(キャハハッ♪　じよーだんじよーだん！　じよーだんだつてばあー！　まあ、マジアちゃんも困惑しているようだしいー、脱線は終わりつてことでオケ?)」

「(早くしろ。おまえ、殺されたいんだよな?)」

「(おーっと、呼び方がてめえからおまえにランクアップ！　われ

ながら、どこで好感度にプラス補正が付いたのかわかんないや、テへ☆　……………あ、やめて、それやられると不快だから、うん、ほん

とうに。はあい、真面目にやりますよお……………とでも思っ、いやジョーク、ジョークだからあ……………)」

眼に魔力を思いっきり込めつつやつを凝視したのだが、この反応からして、やつにはそれが効果的のようだ。

「(コホン、えー、自己紹介ですね。わたしたちは名前のないネームレス・ゴースト。年齢は不定。出身地も不定。どうぞ、これからもよろしくお願いしますうー。)

あの一、ちゃんとしたので、その魔眼に魔力を意図的に流すのを止めてほしいなあー、アハッ)」

「(む。もしそうすれば、おまえのことが見えなくならないか?)」

「(アレッ、もしかしてー、わたしたちのことをずっと視ていたいとかー？　なに、ひよつとして惚れたとかあー?)」

「んなわけないだろ。ずっと監視してないと、おまえが何かやらささないか心配なんだよ。……で、どうなんだ？」

「ああ、なるほどー。それは『意図的に流すのを止めて』というフレーズから推測しなさいな。これで解んなかったら思考力ゼロの疑いありですよー？」

「—————」

全力で煽ってくる幽霊少女は視界に入れつつ黙殺して、やつ曰くイージー問題に取り組む。

まず前提として、あいつは魔眼に魔力を意図的に流すなど言った。オレとしては睨みを利かせるつもりで眼に魔力を籠めたのだが、それは高位な霊体のあいっにも効くような直接的攻撃となった。魔力を意図的に籠める前はそのようなことはなく、さらに、あいつが視えるようになる前は魔眼を開眼できていなかった。

このことから、この新たに手に入れた魔眼には二段階あることが判る。一段階目は魔眼を発動して霊を視えるようになった状態。二段階目は魔眼に一定水準以上の魔力を籠めることで、じつと視るだけで霊体にダメージを与えられるようになった状態。

つまり、一段階目の状態にキープしておけばよしってことか。

「ようやく理解できたようだねー、すごいすごい。いやー、全わたし感動したよ！」

「白々しいわ。……ところで一つ訊くが、おまえは刀を寄り代として辛うじて現世に存在している集合霊おまえたちの司令塔という認識でいいか？」

「(……よくわかったねえー。や、これは素直に褒めておくよ。意外とやるんだね、アナタは)」

おおー、当たってた。

この、どうしようもなく性格の悪いやつが、感心したような口調で認めたのだ。仮説は間違いなく、確実に合っている——

「(と言うとも思ったかい？　アハッアハハッ！　残念ながら、

それは50点の解答なんだな☆　アハハハッ！)」

「(……………)」

やっば殺そう。

こいつを現世に留めておくのは、オレの精神衛生上よろしくない。僅かながら思うところがあつたから留めておこうと考えたのだが、その判断は誤りだったようだ。

「いやあー、それは早計だよお。ほら、アナタにとってわたしたちを留めておくメリットって、たくさんあるし。たとえば、死角から接近してくる脅威を伝えたりだとか、霊体に対しては共闘できたりとか………ね?）」

「(死ぬ。おまえたちを留めておくメリットがそれしかないなら、デメリットの方が大きいんだよ。乗っ取られないように常に気を張ってなきやいけないストレスがわかるか?)」

「(………仕方ない。なら契約だ。そうすれば、わたしたちもアナタも安心して暮らせるからねえ)」

「(ハ、契約だあ? おまえがきっちり契約内容を守るんなら文句はないけどさ。………最初にお互いの譲れない最低条件を確認・譲歩してのち合意。その後はこつちが有利になるような条件で結ぶってことでいいな?)」

「(ふうあ、それでいいよお)」

「(よし。じゃあまずはオレか——)」

そうやってこちらから聖域を切り出そうとした、まさにそのとき。オレの耳は使い物にならなくなった。

「——お坊っちゃまー。日も暮れてきているのでそろそろ帰りましょう!!!」

その声、豪雷のごとく。

無防備なオレの鼓膜に小さくない衝撃を与え。

人の行き来が活発な商店街中に響き渡った。奥様方の世間話や店売りの人の声でざわざわとしていた日暮れ時のマウント商店街は、まるで深夜のときのような静寂さに包まれた。

「………マギア、とりあえずこつちへ」

「は、はい? そちらは逆——」

有無も言わさず引つ張る。

あのまま動かずに路上に突っ立っていたら注目の的にされる。それはごめんだ。

適当な路地裏を歩き続けて、なんとか群衆の眼という眼から逃れた。

「(あー、そうだったそうだった。そりやマガアちゃんも怒鳴るよねー、うん。でも、だとしても騒々しかったよー、アハハー)」

お気楽ご気楽な幽霊でさえも苦笑い。

この証言と、聴覚がいまだに復帰していないことから、マガアの音量の凄まじさはお分かりいただけるだろう。

「マーギアーくん？ 帰るべきなのを知らせてくれたのはありがたかったけどさ。あの大音量は今後控えるように。寿命が縮めるかと思っただぞ」

「承知しました。以後控えます。それよりもいま、私の本名を口にしましたね？」

「……………あ、そっか、やばー！」

「あと2回。勝利が見えてきました、ふふ」

「(アハハッ！ 迂闊だねー、わたしならそんなミスしないよおー？)」

「うっさい、おめーは黙ってろ！」

「はて。お坊っちゃん、後ろには誰もおりませんが、いったい？」

「……………ふん、なんでもない(あとで覚えてろよ、おまえら)」

「(————アハッ！)」

二人と一体で暗い夜道を歩いていく。

街灯の光はなく、ただ月光のみが道を照らす。

天上には欠けのない満月。

輝ける星。

ああ。これだけ綺麗な夜空なら、星占いをしてみてもよいかもしれない————

誰もが寝静まった深夜、一人の男が歩いていた。

点滅する街灯の光と雲に隠れている月の朧気な明かりを頼りに道なりに足を進めていた。

彼はこの日を五年もの歲月待ち望んでいた。ある少女が己の庇護下に入るこの日を。少女が引き渡される場所は桐洞寺の地下空洞。彼にとってそこは未知の場所であるが、彼のボディガードをしているサーヴァントにとっては既知の場所。むしろ、このサーヴァントのマスターはそこを本拠地としているので、そこに関してこのサーヴァントは誰よりも熟知している。

男の住む新都の蟬葉マンションから深山町の最奥にある桐洞寺までの道のりは遠い。この長い行程の一步一步を噛み締めて歩き続けると、あるとき男はついに桐洞寺の階段前に立った。

ここから先へは、男にはどう行くべきなのか分からない。そのため護衛のサーヴァントが道案内を行うのだが、その前にサーヴァントは男に覚悟を問いただした。

「おう、雁夜。わしから貴様への最後の忠告じゃ。よく聞くがよい。桜を魔の手から守りたいのなら、このまま儂のマスターの庇護を受けるが桜の最善。訊くが、貴様にあの娘を守り通せるか？」

「……………確かに、そうすれば桜ちゃんは安全だ。さすがの臍硯も、あんたらとあんたらのマスターを相手にしようとは思わないだろう」

「で、あるな」

「でもさ、それだけじゃダメなんだ。おまえのマスターは前にこう言っていた。『私に預けることイコールこの娘がいつ死んでも構わないということです。それを心しておくようお願いしますね?』ってな。そんなことを言うやつに桜ちゃんは任せられない。だから、俺が桜ちゃんをヤツラから守ってみせるんだ!」

「フツ、よく吼えた! うむ、そうでなくては桜はお前に預けられま

い。よし来るのじゃ、バーサーカーの元マスターよ！　我がマスターの許可が下りた！」

そう言うやいなや赤い軍服を身に纏ったサーヴァントは、間桐雁夜がガッツポーズを取る間も与えずにずんずんと林の奥へ進んでいった。慌てて雁夜はその跡を小走りで追う。

樹木が鬱蒼と生い茂る深い山だ。

地面どころか視界をもまるごと覆い隠さんばかりの緑は、春の生命力を否応なく感じさせる。そのなかで雁夜は右左それぞれの手で多層に連なる葉を払いながら足元のみえない道なき道をひたすら進む……はずだった。道案内役が、うわっはっはと周囲に炎を撒き散らす炎上系サーヴァントでなかったのなら。

「……………」

「……………っはっは！　……………む、なんじゃ、その何か珍妙なものを見たかがごとき表情は。言うてみい」

「……………ああ。なんで森林を燃やしてるのに平然としているんだよ、あんた。そもそも、なんで森を燃やそうという発想に至ったんだ」

「は、そんなことか。知れておる。だって、わしら人間が通るのにこやつら邪魔じゃろ!?　なんじゃこの荒れに荒れた雑木林は！　こんなもの、野を駆ける獣ですら鬱陶しがるわ！　じゃからわし直々に燃やしてやった、是非もないネ！」

「そ、そうだよな……。日本各地に整備されている道路も、元を辿れば人間が野原や山地を開墾して出来たものだしな……。仕方のないことだな、うん」

このとき雁夜は「フッフ。今度は森林焼却ですかアーチャー。本当に好き勝手やってくれますね。いつも後始末をする私とキャスターの身になってほしいものです」と、長くため息をつく誰かの声が聞こえた気がしたが、幻聴として深く考えないようにした。

「……………で、あるな。さあて、ここからは急峻な崖じゃ。わしは霊体になれるし落ちても問題なしじゃが、お前は気を付けて下りるのじゃぞー！」

「わ、わかった——うわ」

雁夜が絶句するのも無理のない。

そこは落ちたら即☆死のデンジャークリフ。しかも本来は、崖上のために足場の無いことを、溢れる緑が隠しているため、ここは冬以外限定でデッドエンド直線の天然トラップが張り巡らされた死地となっていたのである。その嘗てあった事実を、未体験の間桐雁夜は知らない。

ちなみに炎上サーヴァントは、初めてこの地に来たときにマスターを巻き込んで崖から真つ逆さまに落ちている経験者だ。だからこそそのアドバイスと云える。

「——ふう。なんとか無事に降りられた。ありがとな」

「気にするな、わしは当然のことをやったまだよ。それよりも、あそこに小川があるじゃろ？」

「ああ、そうだな。それがどうしたんだ？」

「分からぬか。ほれ、川が流れていけば、すなわちその水源があるのと同じ同意となる。よって——」

「そうか！　つまり、その奥に待ち合わせ場所の大空洞があるってことだな!？」

「うむ。行くぞ雁夜、ここからが本番じゃ」

間桐雁夜は身を引き締める。

洞窟に喉をゴクリと鳴らす音がした。『ここからが本番』炎上サーヴァントが発した言葉に嘘偽りはない。明確な勝者が誰も輩出されなかった五年前の第四次聖杯戦争において、まさしくそのマスターの陣営は最強だった。二騎のサーヴァントをしたがえ、さらに当の本人もサーヴァントに匹敵する強さという反則級の陣営。唯一彼らに対抗できたのはキャスター陣営のみ。彼ら以外の陣営は操り糸で踊らされているかのようだった。最終的に残ったのはセイバー陣営だったが、それに雁夜は作弄的な念を禁じえない。あるいは、そう思っていることすらもヤツの思惑のうちか——、

「(……落ち着け。まず今の俺は、桜ちゃんをどう取り戻すかだけを考えないといけない。具体的にどう守るかは、その後に考えよう)」

策謀においても、実力においても、雁夜はアーチャーのマスター

に遙か及ばない。ならばどうするか。答えは単純明快。想いで勝利すれば良いのだ。執念とさえ呼べるであろう桜への想いにおいて、雁夜は少なくともあの吸血鬼に勝っている。

「(そうだ、そうだ、そうだ。あんなコトを言ったヤツに、桜ちゃんを守る資格なんてない。俺が絶対に桜ちゃんを守ってみせるんだ!)」

間桐雁夜は一人で気持ち盛り上げていく。

その決心が、致命的な間違いを引き起こそうとしているとも知らずに。

「——着いたぞ、雁夜よ。我のマスターがお前を試問する場じゃ。よく悩み、よく考えて、答えを出すがいい」

「……………」

うつすらと黄金の輝きが、雁夜の立つ広間の入り口からも見えた。魔術師としての修行をしばらくしていない雁夜でも判る、純粹に過ぎる魔力の質。それは、五年前の真実を知る者からすれば考えられないさまだ。

カツカツという音が洞窟内に響きわたる。

それはまるで馬の蹄が地を鳴らす音のようだと雁夜は直感した。以前、雁夜が東京に住んでいたとき、ルポライターの給料だけで生活費は足らなかつたために一攫千金を狙って競馬場に行つたことが何度かある。そのとき聞こえた音に酷似しているのだ。

やがてその音が大きくなっていくと、あやふやだったシルエットも明確になる。それから数秒すると、目を凝らさずとも、一匹の機械仕掛けの馬に一人の絶世の和風美人が乗っている姿が見えた。そして目測で十メートルくらいの距離になると、その動きを止めて話を切り出した。

「久しいですね、バーサーカーの元マスター。死んでいないようですねによりです」

「……挨拶はいらない。桜ちゃんはどこだ?」

「安全の確保されている場所にありますので、全く問題ありません。ノープロブレムです。あなたは、ただ私の質問に正確に答えればよろしいのです」

「ふん、そうかよ。信用できないな」

「……………私、約束は守る主義なのですがね。生憎メンタルまでは鋼鉄といかないもので、そう面と向かって言われると流石に傷つきます。」

——あ、どうしても信用できなくて問いに答えないおつもりなら別に帰ってもらって構いませんよ。そうなれば、間桐桜の生殺与奪は私の一存で決められるということになりますから。私としてはベストです」

「……………っ！」

今の間桐雁夜に力はない。

いや、仮にあったところで、蟲を戦わせるだけの魔術では目の前の吸血鬼には敵うまい。爪を肉に食い込ませる鋭い痛みで氣を確かにしなければ氣絶する存在なんて、もはやバケモノの領域に足を踏み入れているどころか君臨していると雁夜は断言できる。そんなヤツに抵抗など無意味。間桐雁夜はやむを得ず「わかった」とだけ告げる。バケモノの提案に乗ることにしたのだ。

「……………その賢明な判断に感謝を。では、まずはこの一題からといきましょう——あなたは、間桐桜に命を賭けられますか？」

「答えるまでもない。俺は、桜ちゃんを守ってみせるんだ！ たとえこの命に代えてでも守ると、そう決めたんだから！」

「では次に移ります——あなたは、間桐桜を何者からも守れると、本気でそう思っていますか？」

「っ……………、守れない、かもしれない。認めたくないけど、今まで桜はアンタが守ってたから臆視も手が出せなかつた」

「ええ、その通りですね。では最後に——あなたは、間桐桜を守るためならば、私の命令に絶対服従できますか。できるのですしたらもちろん間桐桜に私たちは危害を加えませんし、むしろ全身全霊であらゆる脅威からこれを守りましょう。——間桐雁夜、あなたの選択に今後の運命を委ねます」

雁夜は脳の回路を必死に回していた。

女の問いを肯定すれば、桜は魔術の世界に関わらずに平穩無事な生活を送れるだろうと雁夜は考える。が、その場合は雁夜自身の身がどうなるか分からないし、このバケモノの言った内容に抜け道が隠されている可能性は否定できない。

女の問いを否定すれば、桜と雁夜は臓硯の魔手に毎日怯えて過ごさなければならぬことになる。そのうえ臓硯に襲撃されて桜を連れ去られては本末転倒だ。そうなれば、桜はずっと地下の蟲蔵で責め苦を受け続けなければならぬことは必至だ——が、雁夜は桜が妖怪から絶対に逃げられる策を閃いた。

「断る、アンタは信用できない。それに、桜ちゃんが普通の幸せに暮らせるような場所に俺は心当たりがあるんだ」

「なるほど。つまり？」

「言わない。あんたは信用できないからな。これで終わりなら、早く桜ちゃんを返してほしい」

「……………そうですか。では、行きなさい。それがあなたの答えなら。桐洞寺で桜が待っています」

「本当だな。——ならいい、わかった」

頷くままに雁夜は駆けた。

第四次聖杯戦争に参戦すると決めた二つの動機。その一つは達成せしめられた。しかし、いまだ一つは実を結んでいない。

「やっとだよ。やっと助けられるよ、桜ちゃん」

ただし、それも今日までのこと。

雁夜は口元に弧を描いた。夜明けは近い。桜を時臣亡くして葵ありの遠坂邸に連れていけば、古くからの遠坂と間桐の盟約によって臓硯は強引に桜を手を出せない。あのバケモノがどう動くかは判らないが、迂闊なまねはしないだろうと確信していた。

空洞まで来た道からまっすぐ戻ると、雁夜は石造りの階段に出た。月明かりが門までの道を煌々と照らしている。

雁夜の体力は、五年前と比べマシになっているとはいえ貧弱だ。それ故に一段一段確実に上って桜が待っている寺に着く。

門から先は黒一色に染められていた。光が強すぎるせいだろう

か、その影は濃く果てしない闇だった。

「あら、貴方はこちらへは来ないのかしら。そこからですと私たちはよく見えないでしょう。暗闇の様子は同じ暗闇にいなければ判らなくてよ」

これは落ち着いた女の声だった。

境内からの声のようであるが、雁夜には女がどんな様態なのかはてんで判らなかつた。けれども、そのとき雁夜は耳聴く女の言った『私たち』に着目した。『私たち』とは、あの境内の女と誰かを指すはずだと雁夜は考える。そして雁夜は洞窟のバケモノの指示と自らの願望から、誰かは桜だと結論付けた。

「…………いや、ここからでも十分わかる。あんたの近くにいるのは桜ちゃんだ。確かあんたはキャスターだったよな。サーヴァントはマスターの命令には従うんじゃないのか?」

「そうとも限らないわ。対魔力の高いサーヴァントや特殊な宝具を持つサーヴァントならば令呪による強制をもはね除けられますからね。もつとも今のところ私にそうする気はない。だから、基本的にはマスターの指示に従順よ」

「なら桜ちゃんを返し——」

「その前に。あなたがどのようこの子を守るのかをお聞かせ願えなにかしら。でなければ、ここから即刻立ち去ってもらうことになるわ」

「……………なんでだ。なんであんたは——」

「そこまで桜に肩入れするのか、ですって? 簡単なことよ。私は五年前のあの日からこの子の世話と保護を一任されている。その間に愛着が湧くのは当然のことじゃないかしら」

「……………」

「べつに、そんなことはどうだっていいのよ。それよりも、私の質問に答えなさい」

暗闇に魔方陣が続々と浮かぶ。その一つ一つが人ひとりを優に殺せる大魔術。これはキャスターの意思表示だ。桜を守る手段が雁夜に無いのなら、雁夜を強制的に排除して私キャスターこそが桜を守

るといふ決意を空間に実体化させたのだ。

雁夜は逡巡する。はたしてキャスターを信用してよいものか。キャスターの質問に答えるべきか答えぬべきか。そして、そのどちらが桜にとつて望ましい未来になるのかと。

時針が半回転するほどの時が流れたころ、ついに雁夜は答えを出した。

「……………遠坂邸。そこに桜ちゃんを匿う。臓硯は間桐と遠坂との間には昔から相互不干渉の協定が結ばれていると口にしたことがある。なら、ヤツが関与できない遠坂の家に桜ちゃんを連れ込めれば俺の勝ちだ。キャスター、これでいいだろう」

「……………よく考えたものね。いいわ。マスターの催促を無視するのもそろそろ限界でしたし、その答えでよしとしましょう——桜、行きなさい」

「……………はい」
キャスターからの承諾と共に魔法陣は崩れるように宙に消えていった。

緩慢な足音が暗闇の境内にいるキャスターから、あと一息で雲隠れしそうな月からのか細い光が射し込む門前の雁夜へと移動していく。そして足音の主のシルエットが門の外に追放されたとき、月は完全に雲の内側に隠れた。

「桜ちゃん。やっつだ、やっつだ——」
「……………おじさん」

雁夜の夢は叶いつつあった。

桜は手元にあり、時臣は戦死し、凜や葵は遠坂邸にて平穏に暮らしている。あとは、雁夜が桜と共に遠坂邸に行き桜の旨を葵に申し出れば、ここに雁夜の抱いた理想は結実する。

……………ふと、雁夜は桜を上から下までまじまじと見つめた。バケモノやキャスターから酷い仕打ちを受けていないかと不安になったからだ。

「(良かった、見たところ怪我は無さそうだ。髪や服も清潔で整えられている。何よりも——)」

目に光が戻ってきている。

毎日のように繰り返される苦痛に頑張つて耐えなければならぬ間桐家の生活から解放されたことが第一の要因だろう。しかし、それだけではない。他に理由があるはずだと雁夜は考えた。

「わからない、けど」

桐洞寺での五年に及ぶ暮らしが桜に光を与えたのは間違いないと雁夜は推測した。サーヴァントのキャスターやアーチャーに、癩に障るがヤツの尽力もあつてのことのはずだとも。そしてそうであるなら、不承不承だけでも礼は言わねばと雁夜は自然に思えた。

階段を下りようとしていた足を止めて、くるりと半回転し桐洞寺の門に体を向ける。相変わらずの暗闇であつたが、不思議とキャスターがまだ境内に居ることは感じ取れたので、雁夜は宣言した。

「……………桜ちゃんを守ってくれて、救ってくれてありがとう。キャスター、アーチャー、それに、そいつらのマスター。けどもう大丈夫だ。これからは、俺が桜ちゃんを守ってみせるから」

「俺の作戦は、完璧なんだ!!」

だー、だー、だー、と桐洞寺の敷地一帯にコダマが響く。セットのガッツポーズは響かない。

——余韻に浸っていた雁夜は、キャスターがくすくすと笑っている声を聞くと、急ぎ足で桐洞寺から去つていった。間桐雁夜は一度も振り向かず遠坂邸へと足を進めた。

キイキイ、キイキイ、キイキイ。

住宅街に潜んでいた異形のナニカがひっそりと尾行していることには気付かずに——、

——遠坂邸は深山町の洋館側で一番の高台に位置している。間桐邸も深山町の洋館側であつたが、遠坂邸よりは低い場所に位置していた。つまり、遠坂邸に行くには間桐邸を通らなければならぬのだ。

雁夜は遠坂邸へと続く坂を登っている途中にその事実に勘づいたが、これはキイキイと鳴く蟲の耳障りな音を聞いたためであつた。

時、すでに遅し。

「あ、ああ……………」

「ほ、ようやく来たか。まずは誉めてやるぞ雁夜。よくぞあやつらから桜を取り戻してくれた。カカ、謙遜するでない、おぬしはワシに到底できぬ偉業をやり遂げたのだ。歓喜に咽び泣いてもよいのだぞ、ん？」

間桐臓硯。

ある秘術によって数百年の時を生きる妖怪。実質の間桐家当主であり、雁夜の理想と桜の平穏のためには絶対にあいつには会ってはならなかった天敵中の天敵。

「雁夜よ。おぬしはその偉業に免じ、この五年と同じように無意味な余生を送るのであれば見逃してやってもよい」

「……………桜ちゃんは、どうなる」

「当然、魔術の鍛練に身を投じることになる。五年もの月日を無駄にしたのだ。そのツケを払ってもらわねばな」

「くっ……………」

雁夜は顔を憤怒に歪ませる。

桜が葵や凜と公園で遊んでいた頃に有った無邪気で幸せそうな表情。桜が蟲蔵に放り込まれて酷い仕打ちを受けていた頃の絶望と諦観しかない表情。桐洞寺のサーヴァントらが五年の歳月を懸けて取り戻した桜のたおやかな笑顔。その笑みが臓硯によって、また喪われようとしている——それを、それを、黙って見過ごせと言うのか、と雁夜は激怒した。

「む？　雁夜よ、それは一体どういうつもりだ。よもやワシの好意を無下にする気ではあるまいな？」

「ふざけるな爺。桜ちゃんがようやく取り戻した笑顔なんだ。それを簡単に奪わせるものか！」

諦めて臓硯の場所に赴こうとした桜を雁夜は手で制する。蚊が鳴くほどの声で大丈夫だと呟き、臓硯に真正面から相対する。

「……………フム。そうか。ならば、特別にもう一度だけ機会をやろう。今すぐ尻尾を巻き——」

「くどい。さつきも言ったはずだ、簡単に奪わせるものかとな。桜ちゃんは俺が守る！」

「痴れ者め。桜を置いて逃げてしまえば、安穩とした余生を送れたものを。カカ、こうなってしまうては致し方ない。極めて不本意ではあるが、貴様は桜の眼前で蟲の肥料にしてくれよう。なに、間桐の血脈でありながら祖であるワシに楯突いた罰と思えば軽いものよ」

「臓、硯……………ッ！」

「カカカ、ワシが憎いか雁夜！　だが、それもこれもマキリ700年の大願の成就のためには避けては通れぬ道なのだ。桜の犠牲など我らの悲願の前にはちっぽけな歯車に過ぎん。いや、むしろそれで宿願が叶うのであれば誇り高きマキリの一員として桜も幸せ者であろうよ。カカカ、所詮落伍者のおぬしには到底理解の及ばぬことであろうがなあ！」

「ゾウ、ケンツ……………ッツ!!!」

臓硯は呵々と哄笑を夜明け前の町に響かせる。

雁夜は桜を逃がそうとじりじり後退していたが、それをみすみす見逃す妖怪ではなかった。手に持つ古めかしい杖で地面をトンと叩くと大量の蟲が沸き、ソレラは獲物を捕らえんと一斉に雁夜と桜に攻め寄せる。

もはや絶体絶命と身を投げ出す覚悟を決めた雁夜は、桜に俺を置いて逃げるように諭すと、彼らを狙う蟲どもを引き付けるために一直線に臓硯のもとへ駆けた。

——その刹那。コンマ一秒にも満たない思惑の交錯の間を突いて乱入者が現れた。

「ヌ、キサマは……………!!」

「なんで、おまえが……………!?!」

その乱入者は、地面から一瞬にして数多の槍を突出させ、数百にも上るであろう蟲という蟲の大群を例外なく串刺しにした。さらに、蟲を操る間桐臓硯こそ刺されてはいないが、その周辺には牽制するよううに槍がいくつも突き出されていた。

マキリの妖怪は天を見上げた。

雁夜もつられて臓硯の視線を追うと、そこには。

「カカ。またも邪魔立てするか、キヤスターとアーチャーのマスターよ。キサマと最初に対決してから早200年。第三次の一時期を除いて悉くマキリの足を引つ張ってきおつて。まあ、あのときの大聖杯の篡奪を防いだ手際だけは評価してやるがな——カ、ヤツの名はダー……なんじゃったかの？」

「ダーニック・ユグドミレニアですよ、マキリの老いぼれ吸血蟲さん。………フフフ、あのときは手を貸していただきありがとうございます。私の目的遂行にヤツの存在はマイナス材料でしかありませんでしたから」

「カ、そうかダーニックという名だったか。アヤツの悲痛に歪んだ顔ばかりが印象に残って分からねんだわ。大聖杯を目前にしたヤツの表情は、うむ。傑作の一言であった。カカカ、あれはアインツベルンとワシとキサマの共同作業が生み出した唯一無二の成果よの」

「………しかし、アインツベルンは本当に厄介な課題を残して散っていきました。自分たちがやらかした後始末くらいは自分たちですべきって思うんですよね。キヤスターが残っていないかどうか調べていたことやら」

「カ、まだ分からぬぞ。第五次でアヴェンジャーが再び喚ばれる可能性も——」

「ほんの僅かですが——それよりも本題に入りましょう。取引です」

「ホ、取引とな？」

「契約とも言い代えられますが。これを」

鉄仮面のような表情を無理やり歪めて作ったような不気味な笑みで、二体のサーヴァントを従えるマスターは一枚の紙を間桐臓硯に投げ渡した。臓硯は眉を八の字にしかめる。

「む、これは——」

「セルフ・ギアス・スクロール。私とアナタほどの魔術師となれば、単なるギアスでは縛れない危険性がありますから。よく読み込んだ上でサインをしてください」

「うむ、しかと」

雁夜は途中まで、意味の分からない会話を茫然と耳で追っていたが、桐洞寺のマスターが臓硯に『取引』をしようと持ちかけると顔色が変わった。『取引』には桜や雁夜の取り扱ひも含まれていると直観したからである。

臓硯は、受け取った紙の文面をじっくりと時間をかけて読み込んだ。このような内容であった。

『浅神藤舟が息女、鏡水・ユグドミレニアが間桐家当主・間桐臓硯と契約する。』

——間桐臓硯は下記の条項を締結する——

- 1、全礼呪を以て自らのサーヴァント、アサシンを自害させる。
- 2、間桐雁夜に危害を加えない。
- 3、間桐桜に対して淫蟲を用いた鍛練をしない。
- 4、鏡水・ユグドミレニアとそのサーヴァントに対して危害を加えない。
- 5、1の条項は契約以前に行うものとし、2～4の条項は契約した直後から発揮されるものとする。

——鏡水・ユグドミレニアは下記の条項を締結する——

- 1、第五次聖杯戦争が始まるまで、間桐一族に危害を加えない。
- 2、自らのサーヴァントも同上。
- 3、間桐臓硯に間桐桜を返還する。
- 4、間桐雁夜については干渉しない。
- 5、1～4の条項は契約した直後から発揮されるものとする『

「……………うむ、よかろう。断ればこの場で殺されかねんからな。ワシに選択の余地は無かろうて」

「ええ、そういうことです。それにお互い吸血種の身ですし、太陽が昇る前にお願ひしますよ?」

「無論、心得ておる——む?」

と、臓硯がスクロールに署名しようとする、黒装束でドクロの仮面をした者たちが、二人のマスターと一人の元マスターを取り囲むように、何もなかった空間から突如として現れた。その中の一人が代

表として、マスター・臓硯に異議を申し立てる。

「臓硯。貴様は私と契約するとき、次の第五次聖杯戦争での勝利を確約したはずだ。それを反故にするつもりか」

「おお、そうであったそうであった。カカ。なにぶん古い耄れの身ゆえな、すっかり忘れておったわ。もちろん今日までのお前たちの忠誠を反故にするつもりはないぞ——」

「——全令呪を以て命ずる。アサシンの全総力で鏡水めを殺したのち、自害せよアサシン」

剣呑だったアサシンの纏う気配は、臓硯の命令で完全に彼らのマスターへの殺気に模様替えした。しかし彼女らの意思とは裏腹に、その四肢は、既に杭を手にした最強のマスターを殺すべく動いていた。

「臓硯、キサマ——！」

「カカカ、悪く思うなよアサシン。なに、どうせ死ぬのだから最期は華々しく散らせてやろうというワシの慈悲なのだからなあ……………」

「——それは、それは。このアサシンにはいらぬ心遣いでしたね、マキリ・ゾオルケン。A級サーヴァントならまだしも、それ未満の有象無象は本気の私にかかれば秒と持たない。アサシン18体の血と魔力、まるごと頂戴いたしましたよ。アサシンの元マスター」

「ぬう……………!?!」

臓硯は周囲を凝視する。

ギアスに署名していた間に起きた出来事だ。その数秒の間に手駒のアサシンが全滅するとは思わなかった臓硯はせめて何が起きたのかを、アサシンが殺された痕跡から推察しようと試みようとした。

しかしそれは到底不可能なコトであった。なぜなら——、
「バカなバカなバカな、そんなハズはない。仮にもアレラはサーヴァントの末席。いや、もし本当にアサシンを一秒以内に殺せたとしても、串刺しならば必ず痕跡は残る、だのに路上に、血の一滴傷跡の一つすら残さぬなどあり得ぬわ……………!」
ええい、桜も雁夜も死ん

だように眠っておるし、あとであやつらから直接聞き出すこともできぬか！)」

そこまで臓硯は思いを巡らせると、あるイヤな予測に行き着いた。……そう、彼らは死んだように眠っているのではなく、ほんとうに死んだ、そう殺されてしまったのではないかと。

「——待て、鏡水。まさか桜も雁夜も殺してはなかるうな。あれらは、桜はワシにとって大事な大事な孫だ。よもや——」

「いいえ、眠らせただけです。情報漏洩は出来るだけ避けたいので。情報戦に勝利し、そして磐石な兵力を整えることで、最終的なゴールである戦略的勝利は初めて目前となる。師の教えです。これを遂行するためには、土台であり現段階では前哨戦でもある情報戦で敗北するわけには参りま——コホン、私とすることが話しすぎましたね。契約は結べましたから、これにて解散としましょう。それでは、ごきげんよう」

女は去った。

臓硯はしばしその後ろ姿を睨んでいたが、空が白んでくると、桜一人を抱えて背後にある間桐邸へ帰っていった。雁夜は道に転がったままである。

間桐家の人々の運命は定まった。然れども、それは第五次聖杯戦争直前までのもの。それぞれが生き延びるか否かは、それぞれの選択と運命次第である。

——宿命の時まで、あと5年。

第1章 とある編

第1話 わたしの識らなかつた世界

林立する高層ビル群。

宙をゆうゆうと走る飛行船。

そして、この物静かな公園にて無数のハトに襲撃されている金髪の女子生徒。

このような平和な時間が流れるこの場所は、わたしの得た知識によれば『学園都市』と呼ばれているらしいのだが、謎は多い。

東京西部のほとんどの陣取っているその巨大な実験施設の最終目的は何なのかとか、どこにマトモな食材を使ったレストランがあるのかとか、ツンツン頭の黒髪男に助けられた少女の運動神経の酷さとか。

正直に言うとうそいった謎を解き明かしたい気持ちはひどく大きいけれど、それを後回しにしなければならぬ事情がわたしにはある。そして、その事情は噛み砕こうとするとえらい時間を取るであろうことは先刻承知しているので、これをたった一言で片付けてしまうことにした。

『試練』

死んだときに授けられた、神様からの贈り物。

一度の甦りを可能とする、転生者への挑戦状。

そして、それはわたしの場合、絶対に掴まなければならぬ希望への架け橋。

彼を救うことは、あの国を亡ぼすことと同義。

しかし、あの国の可能性を残すためには彼を救うことが必要不可欠。

自らを神と名乗るあの超常的な存在は言った。彼が正しい道に進もうとしたときには、彼の姉が絶対に彼を殺すだろうと。

なら————わたしが彼を助けないと。

彼には、ロンドンで助けられた恩があるから。

彼はわたしだけじゃなくて何十万人もまとめて救ってくれたから、一人一人の顔と名前まで覚えてくれてないだろうけど。それでも、わたしは彼を助けたいんだ。

「(でも、まずは住む場所を) 見つけないと……」

人を助けるなら、まずは自分が万全にならないといけない。しかし、今のわたしは万全とはとても言えない状況にあった。

人脈がなく、お金もなく、戸籍すらもないわたしが学園都市でホームレスになったら確実に死ぬ。だからせめて、夜になる前に安全な寝床を確保したいのだが、しかして現時点でのわたしは迷子である。

当初は神様から貰ったチートの一つである『原作知識』のおかげで、宿泊先をいくつか考えることができたのけど——コトはそう上手く運ばない。

「(記録を洗いざらい探しても無理。学区や外観だけじゃ、どこに誰が住んでいるかなんて) 絶対にわからない……」

腕を宙で組みながら、唇を噛み締め唸る。

これはもちろん、周囲に人がいないことを確認してである。誰かにこんな情けない姿を目撃されたら、羞恥で悶え死にそうだ。

「(ううん、) 考えるの(よ。たとえ住所が分からなくてもどうにかする手は) 必ずあるはず)」

第一候補は桃色ヘアの妖精さんだった。

生活環境に目を瞑れば、面倒見がよく、さらに教師であるため色々と融通のきいて、しかも暗部との繋がりはないという絶好の立ち位置に座す妖精。

彼女なら戸籍問題も解決してくれそうだし、ひよつとしたらわたしも学校に通えて、運が良ければ超能力を身に付けられるかもしれない。

しかし、その居所をわたしは知らない。己の足で探索したけれども、記録の中にあるあのボロ小屋はどこにもなかったのだ。

「(誰かそこを知っている人を探す、とか。たとえば同輩のじゃんさん

——ううん、この人も難しいんだよね、妖精さんと同じ理由で。主人公のツンツン頭さんも厳しいかな……」——うん？」

彼はさつき、いた。

今も、いる。

ベンチに椎茸姫と仲良く座っている。

今日のわたしは、運が良い。ラッキーデー。

行こう。姫を怒らせないように。精神操作に良い思い出はないから。

「ごきげんよう」

「……どうした？ 俺と食蜂に何か用か？」

ツンツン主と姫の正面に立つ。

姫はフキゲン。バッグからリモコンを取りだそうとしているくらいに。『よくも二人の時間を邪魔してくれたな』と腹に据えかねている様子のよう。背後から忍び寄っていたら危なかったな。ううん、ツンツン主がわたしに興味を示していなかったら、それこそどうなっていたことか。

「君に用。妖精さんの居場所を教えて」

「……………は？」

うん、だよね。

妖精さんなんて言われても、それで通じるヒトはそうそういないのです——が、今ここには頭を覗くことができる超能力者が居てらっしゃる。

学園都市に七人しかいないレベル5。メンタルアウト心理掌握その人が。

彼女がもし悪辣な人柄なら、このような手段は使えなかったけれど。性根は善人。わたしのことを怪しんではいるけれど、頭の内を読み取るコトだけに留めておいてくれるはず。

「……………ふうん。あなたって、見かけによらず相当計算高いのねえ。別にこれくらいはやってあげてもいいけどお、これは貸しにしておくからねえ」

「どうもありが、とう（だけど、無茶な要求を控えてくれると、さらにありがたいの）」

「さあ、どうかしらねえ。これって結構大きな貸しだと思うのだけ
どお。まあ、のちのちに何らかの形で返してくればいいわあ」

それよりもと食蜂操析は上条当麻に体を寄せて、どこぞの根なし
草が伝えたかったことをながながと耳打ちする。

すると、上条当麻の反応は早かった。

「そうか、そういう事情で……ってなるか!! おまえ本当に外国の
スパイなのか!? え、学園都市の動向を探るために来訪した!?

それ以前に用意周到であるべきのそんなヤツが家が無いのに困るか
!?

原則現地調達とか、どんだけブラックなんだよ!? そういう
ことで小萌先生の家に下宿したいって、なんで学園都市の外からやつ
てきたスパイが学校教師に過ぎない小萌先生を知っているんだよ!?

っ、はあ、はあっ……!」「君だけが頼り(なの)、お願い(し
ます。じゃないとわたし野垂れ死んじやうから)」

「いや、自称スパイを野放しにしておくわけにもいかないだろ。うー
ん、とりあえずアンチスキルにでも連れていくか……」

「確かにそれも一つの手だとは思うけどお、その小萌先生って人をこ
の自称スパイの監視役にするのはどうかしらあ。野放しにするわけ
でもなく、かつ本人の希望が通っている。これって、一石二鳥よねえ
?」

「それだ食蜂! そういえば小萌先生の仲良しにはアンチスキルの
人がいたし、その人が身分保証とかをしてくれれば、自称スパイは安
全だ!!」

こうして結論が導き出されると、その後の手続きは雪崩のような
怒涛の俊敏さで終わった。

結果わたしは小萌先生の自宅に下宿させていただくことになり、
かつツンツン主などが通う高校に通えることになり、さらに戸籍まで
作らせてもらった。

自称スパイという設定を教えると各地で驚かれたけれども、最終
的にはどうにかなって良かった。

何はともあれ、これで人脈と戸籍と住みかは手に入った。あとは
マナーだけである。

——が、この問題も学校に編入してから半年後には解決の見込みが立つこととなる。

☆ー☆ー☆

「加地ハベモ。能力によって起こした暴風を円錐形状に纏め上げて投げることで、タンクステン鋼の柱を容易く貫通させる。指定位置から半径五メートル以内の大気を酸素のみにし、引火させることで致死の爆発を引き起こした。この他にも様々な試験結果が報告されており、これらの情報を整理し統合すると、おそらく超能力者^{レベル5}に分類されると思われる。これはツリー・ダイアグラムの試算報告書には無かつたもので、よって当初の報告書に書かれていた空力使用や風力使用の派生系というのは取り消し、彼女の能力は原石由来のものであるとする。学園都市上層部はその能力を大気操作^{エアハンド}と命名。超能力者番付は暫定で第八位。原石由来とされているとはいえ研究が大幅に前進するだろうと、学会の期待は著しく高いが、彼女は元来スパイであることを忘れてはならない。たとえ裏付ける証拠が彼女自身の証言以外にないとしてもだ。」

……外れることのなかったツリー・ダイアグラムの試算を、彼女は初めて打ち破ってみせた。まさにイレギュラーだ。今後ともに彼女の監視は厳重に取り計らうべきというのが上層部の決定であるが、これは当然の措置と云えるだろう……」

☆ー☆ー☆

転生、というか転移してから半年も経った。

ここでの生活も次第に慣れ、やっと勉学のレベルの高さに付いていけるようになった今日この頃。

——わたしは超能力者に開花した。

これは本来は喜ぶべきことである。実際、周囲の友達やクラスメ

イトは祝ってくれたのだし。もつとも、わたしも最初は素直に感動したものだし。その日だけは涙腺が緩んだものだし。

——あれは急転直下だった。

『試練』なんて忘れて、忙しくも素晴らしき日々を謳歌していたわたしに、改めて突き付けられた現実であった。先生と二人きりの教室で、試験結果に小躍りしていたわたしは、突如として暗闇に強制的なアイブをさせられたのである。

眼を覚ますとそこは迷宮だったのだ——！

「……………全地下100層。5層毎に強大な敵。最奥にある聖杯に辿り着いて願いを言えば、それは叶えられて次の試練にコマを進められる」

どこかで聞いたような話だけれど、この迷宮はどうやら単純に層の攻略していけばいいというものではないらしい。第0層と仮称している部屋のテーブル上にあった禍々しい説明書によれば、世界のあちこちに散らばっている原典を集めることこそが第100層への扉を開けるキーアイテムとなるのだという。ヒントは25層毎に迷宮壁に記されているともあった。

全くもって厄介な試練である。せめてもう一人くらい仲間がいれば非常に助かるのだが、ここの迷宮は転生者以外は立ち入り不可能となつている。そのため、やつとこさ出来た人脈を活用することはできない。自力で頑張るしかないのだ。

「(で、ようやくやつと5層に到着。階層扉を開けて五メートル進めばボスが現れると説明書に書かれてたけれど……………」

そのくらい進んでもなお、ボスは現れない。

大理石のような紋様に装飾されている氷のブロックに覆われ、黄金色に煌めく金銀財宝が地に溢れている階層である。《大気操作》で周囲の気温を調節できていなければ凍死していたと自信をもって推定できるほどの極寒にして、財への誘惑を否応でも引き出すフロア。もしかすると、この寒さと欲望自体が階層ボスなのかもしれないと考えてしまうほどのものだ。

——が、その期待は、もう一步足を踏み込んだときに、こ

れまた氷の地面から盛り上がってきた巨人族に裏切られた。

「おおおおおおお———!!!」

氷の巨人の雄叫びは魔力を乗せた刃の衝撃波となつて、全てを切り刻まんとわたしに向けて押し寄せる。

———そして額に迫つた、このとき。

ツンツン頭なら右手で刃を無に返すだろう。

一方通行ならむしろ跳ね返していただろう。

彼なら神懸かり的な直感で回避しただろう。

そのどれもが、わたしにはできない究極だ。

そのどれもが、わたしでは届かない強さだ。

けれども———その総てが、現在のわたしには不可能なこと

であるとしても、別手段での対応は、可能なんだ！

「パターン1、窒素装甲。（わたしは大気系能力者の最上位。レベル5。よつて、彼らが持つ全ての能力をわたしは使える。それも、元のそれらから規模などを上乘せした上位互換として。これもそう。絹旗最愛の能力以上の防御力を誇つている。）容易には破れない」

刃の嵐が総じて窒素の防壁に弾かれる。

弾かれた刃は氷の床にキズを付けていくが、かろうじて引つ掻き

傷のようなものが残るだけ。突貫するには及ばない。

目算百メートル先の敵を視る。

身長はざつと二十メートルはありそうな大男は、背中に背負つて

いた両刃の大剣を苦もなく取り出していた。刃渡りは十メートル超。

それを横に傾けて、わたしを押し潰さんと振り下ろす！

「だめ（、加速も重さも足りない。こんなものでは超上位互換と化した超窒素装甲は）破れない」

二桁トンの氷で造られた剣の形をした兵器は、最硬レベルの鎧の前に敢えなく破れた。それは必然。

でも、これは偶然。まさか、この大剣に取っ手に出来そうな装飾が施されているなんて。今日はラッキーデイに違いない。その取っ手を支点にして引つ張り、巨人の手指から兵器を奪い取る。すると、思惑通り巨人が剣を取り戻そうと怒りの表情で駆けてきた。

「エッセエ！ 一族の誇りをツ、返ッせえッ!!」

—— お望みのままに、返してあげる。

ああ、なんてやさしいのだろう。

一族の誇り。そのような、命に換えてでも守りたいものを、その身に直接渡してあげられるなんて。

「—— ツえ？」

男はしばし放心した後、ぼたりと倒れた。

透明だった冷たい床は朱に塗り替えられていく。

……しかし、さすがは巨人だ。膝を屈した衝撃で震度4くらいの地震が起こるとはね。とんだサプライズだったよ。

わたしは、背後で真つ二つになった巨人に黙祷しながら、つぎの階層へと歩を進めた——！

「—— あれ（この宝の山は）本物？ なら（一旦換金しに地上に）戻ろう（かな）」

余談であるが、彼女は金銭に困らなくなった。

訪れ、連日家の前に記者や研究者が現れ、連日プライベートに記者や研究者が詰め寄ってきた。

その経験で、わたしは記者や研究者を悪質なストーカーと認定した。あいつらときたら、どこにでも現れて質問と勧誘の嵐を浴びせてくるのだ。そんな状況で家に帰れば絶対に迷惑をかけるから、わたしは仕方なく家出を決行し、迷宮で寝食をすることにしたのだ。

「(寝袋って便利。これさえあれば、いつでもどこでも眠れる)」

迷宮の第0層はちよつとした小部屋になっていて、迷宮の手引き以外にもテーブルや椅子や木製の床があつたりする。あとは5層のお宝と交換した紙幣や小切手を保管しておく用の金庫や、ゴミ箱を設置している。

「(お腹、すいたな。第25層攻略は明日か明後日に回して、今日はファミレスで単独ダイナーだ)」

ケイタイデンワとやらを持っていけば、メールやデンワなどをして友達を巻き添えにできるのだが、あいにくアレには忘れがたいトラウマがある。

「(無い物は無い物。わたしは一人で問題ないわたしは一人で問題ないわたしは一人で問題ない。ソロでファミレスはイージー、イージー、イージー、トウイージー、なの!)」

右腕の震えを抑え、迷宮脱出の文句を口ずさむ。

「次は負けないんだからね! (まあ、一度もボスから逃げたことはないんだけど。《大気操作》は、この迷宮を無事踏破させるために神様がわたしに与えたものなのだろうけど、かなりバランスブレイカーな代物じゃなからうか)」

その、たった一節の嫌がらせ染みた詠唱でわたしの世界が創り変えられる。そしてどこからか現れたガスバーナーの炎にも似た青白い光が、わたしを、薄暗い地下大迷宮からネオンを撒き散らすビルの屋上の上空に放り投げた。

もう焦らない。

背に風で編まれた擬似的な翼を四枚作り、お目当てのファミレスの近くにある人気のない路地裏へと舞い降りるべく、糸を数多ある針

穴に連続で通すような風加減で翼を制御して、だんだんと目的地へと近付いていく。

初めてのときは死ぬかと思った。

咄嗟に一方通行の飛行法を頭に思い浮かばなければ路上に沈むミンチになっていたに違いない。妹達の件で好きじゃないけど、ありがとう一方通行。

「——よ、い、しょつと。今回も無事成功して良かった、けど。面倒な予感がする)」

例えるなら雷が脊椎を貫く1分前、みたいな。

わたしは迷信や神様の存在を信じない派の人間だけでも、そういった超自然的な事象の中で、唯一この直感だけは信じられる。なぜなら、それで命拾いした経験が両手の数では足りないほどあるから。「(けど、ここでずっと暇してるのも。うん、この感じは致命的じゃないサインだから行っていいかも)」

か細い月光が道を照らす路地裏からLEDの人工光で満たされた表通り、そして24時間働き続けるファミレスのドアを突き飛ばすような勢いで開いたヤカラの右腕に殴られて弾き飛ばされ路上そのものへとわたしの視点は移った。その少年はわりいと謝りつつも、どこぞのスキルアウトに追われているようで、不幸だーと叫びつつスタコラと遠くへ走り去っていった。

……………いくつか、言いたいことがある。

「不幸なのは、わたしのほう。ツン男。色々と話すことがありそう

……………！ あれ——第三位？」

「あのバカ、あいつらから情報を聞き出そうと思っていたのに……………！ えっ——加地ハベモ？」

埃を落としながら立ち上がると、あのドアを開いてきたのはビリ太ちゃんだった。彼女もツンツン主に不満や怒りがあるらしい。

そうして無言のシンパシーを交わしたレベル5のわたしたちは、あのバカと、ついでにスキルアウトどもを成敗するために橋へと向かう。

「(第三位。ツンツンは)わたし(が)やる。あなたが来ると(みんな

の) 迷惑!」

「つな!? あんた、私に喧嘩売ってるの!?!」

怒声と共に雷が襲ってくる。

が、わたしは意に返すこともなく天高く飛んで、第三位の雷撃の槍を難なく華麗に回避。そして橋へ向けて超音速で飛んでいく。

彼女をなるべく敵に回したくないが、これもわたしが直にツンツン主に制裁を下すため、ついでにこちら一帯の停電や電波障害という事態を防ぐため。第三位が橋に着かない内にツンツン主を片付けな
いと。

「(……………流石に、) 速すぎたかな。でも、(待ち伏せ作戦自体は) 間違っていない(はず。)
いずれ(ツンツン主はここに) 来る」

橋の欄干に着地し、いまかいまかと真下の道路を凝視し続ける。

そうやって、時計の針が一周した頃。

「……………ようやく、来た」

疲弊したツンツン主が、ちょうどわたしが立つ欄干の真下まで追いついた。

「パターン2。無酸素空間。これでツン男は身動きが取れなくなる」

そうやって腕を一振りすると、ツンツン主が呻き倒れた。そのまま気絶してもらえば、わたしの目的は達せられるだろう。

今のところ開発できた他のパターンだと、右腕に無効化されてしまう。たとえば、わたしは常に最低限の窒素装甲を張っているが、この鉄壁以上の防御も《幻想殺し》の前では無力だ。そう、ファミレス前でぶつかられたときのように。

「(……………しまった、想定以上に) 早いね、(第三位の《超電磁砲》^{レールガン}。今のわたしじゃ、あなたと正面からやれば、まず勝ち目はない。) 逃げようかな」

逃げるのは容易い。

ただ、ここで敢えて敵対して、実戦経験を積んでみるのもアリかなとも思う。彼女は甘い。殺さない程度に威力は留めるはず。

でも、あしたは第25層の攻略があるから、それに支障をきたすのはいけない。死なないとはいえ重傷になるかもしれないし。

……うーん。迷う。どうs

「ガツ……っ！　いつつう——！」

「へえ、その様子だと当たるまで雷撃の気配に気付かなかったのかしら。大口叩いた割には全然大したことないのね、第八位」

むむっ……………！

窒素装甲で落下した衝撃は問題ないけれど、この女の挑発に苛ついている私がいるのは問題だ。またトばないように感情をセーブしない……………！

——いや、もうダメかも。

「そんな挑発して、私に殺られる気？　後悔する選択は控えた方が

良いと思うけど」

「ふーん、言うじゃない。加地ハベモらしくない。もしかして、いつもの話し方ができないくらい焦っているとか？」

場の緊張感は制限なく増していく。

加地ハベモが右腕をゆるりと上げると、御坂美琴は髪の毛の先端で放電させる。御坂美琴の周囲が雷に支配されると、加地ハベモは周囲の気を自分の都合にいいように操作した。

——学園都市の第三位と第八位。

この順位付けは、科学にどれほどの利益を生み出すかで決まる。

決して強さランキングではない。

よって、どちらが勝つかは予測不可能。

その対決の結果は、これから示される。

……………はずだった。注釈として、呼吸困難で気を失ったはずの特異な右腕を持つ一人の少年が起き上がなければの条件が入るが。

「なあ、」

立った少年の口が開く。

二人の少女は、うごけなかった。

少年の一挙一動から眼を放せずにしたのだ。

そして、この場で唯一自由に活動できる傷ついた少年は唇を動か

し――

「お前らさ。なんで、そんなにスカートの中を丸見えにしちやってるわけ？　正直に言っつて、残念な体型の君たちに上条さんが揺れることはないが、他のやつらの目の毒になるかもしれないかもしれませんのことよ！？」

後半が早口のオカマ言葉になったのはダイナマイト級の二人の少女のピュアハートに奈良の大文字ばりの炎を点火させたからである。もっと具体的に言うと、空からの落雷と《^{エアージェル}大気砲弾》の波状攻撃が上条当麻を襲ったのだ。

「今回はわたしの不注意も原因……………！　でも許せないの死刑なの……………！」

「加地さん、私も今回ばかりは貴方に賛成！　こいつにはデリカシーってものがないのかしら！」

ちなみに、二人のスカートの内側が上条当麻に見られることになったのは、加地ハベモの起こした大気循環のせいである。全ての大気を彼女の頭上に一点集中させたうえで圧縮させることで、空気爆弾か、あわよくば大気圧プラズマの完成を狙っていたのだ。その試行過程に風でスカートがめくれることは考えていなかったようで、これこそ、加地ハベモが爪が皮膚に食い込むほどの握り拳を作りながら不注意と嘆いた理由だ。

――ここからは後日談となる。

最終的に、二対一の追いかけっこは明け方まで行われたらしい。その後は各々の用事があつて解散となったのだけれども、第八位の少女は夕食を食べれなかったことでの落ち込み具合と徹夜のために眠気がひどく、その日は一日中ダンジョンの第0層の寝袋に籠っていたのだった。

第3話 わたしと私

原作の流れを変えることは、結局できなかつた。

ツンツン主を追う第3位の電撃によって、第七学区は原作通り大規模停電に見舞われたのだ。

わたしは停電を避けるため、暴れる超電磁砲レールガンと逃げる幻想殺しイマジネブレイカーを、この機会に仕留めようとしたが、それは叶わぬ幻想であつた。彼らが想定以上に手強く、わたしは自身が思っていたより弱かつた。上位層の魔術師や超能力者、それにツンツン主への個別対策を早急に組み立てるべきかもしれない。

「でも、それは後回し。仮眠も栄養も摂つたから、いよいよ第25層の攻略を始めよう」

現在時刻は、たぶんツンツン主と赤髪タバコが戦闘をしているであろう時分。つまり夜。モンスターが活性化している頃だ。

——さて。この地下迷宮には、6層ごとに徘徊型モンスターがいる。そして、12層ごとには、準ボス的なのが、転移石がある最奥の部屋の大広間に座している。6層にはトカゲ人間集団。12層にはトカゲ人間集団とワイバーン。18層にはワイバーン軍団体。24層にはワイバーン軍団と5メートル級の竜種。ちなみに、この調子でいくと、第30層は、5メートルドラゴン軍団と準ボスと階層ボスを相手取ることになるが、まあ今はそんなことはどうでもいい。

テーブルの上にある、禍々しい迷宮の説明書を手に取って、第25層の攻略情報を確認する。

階層ボスのいるボス部屋までは一本道。そこまでの道筋にモンスターは皆無。ボス部屋の先の部屋に、原典がある場所のヒントが彫られた迷宮壁がある。ボスの分類はサーヴァント。

「迷路じゃないのは助かるけど、それだけボスが強いってことの表れかも。それに、種族の分類がサーヴァントってどういうことなのか

な。英語だと使用人って意味だけど………?）」

箒を持ったメイドとでも戦うのだろうか。

その画を想像してみたら、なんだかとおつてもファンシーな感じがした。

………まあ、いったんサーヴァントのことは頭の片隅に置いておこう。謎は放置だ。

ところで、ここは第0層。

この一室にある転移岩からは、一度行ったことがある階層の転移石に瞬時に転移できる。便利なものだ。

「転移、第25層」

未知数の敵は不安だが、それは今までと同じ。

これまで通り、倒せば勝てる。

すつと一呼吸入れてから、わたしは青白い光に包まれて――

☆ー☆ー☆

「――つあ」

強い。

これまでの、どのモンスターよりも。

どの階層ボスよりも。あの第三位すらも霞む。

この赤い外套のサーヴァントは、強い。

「I^我 am^が the^骨 bone^子 of^は my^捻 sword^じ――」

つがえ、放つ。

その、一連の流れに、思わず息を呑んだ。

あれは天賦の才だけではない。何千何万と同じ動作を反復して

得た、努力の賜物。あの弓兵は、間違いなく戦闘のプロフェッショナルだ。

これに辛うじてわたしが対応できているのは、ただ天からの貰い物操よってのみ。能力が発現する前であれば、最初の一射で事切れていた。

さながら箒星のような矢が迫る。

軽々と音速の壁を貫くソレは、刹那、捻れ曲がった剣のようにも見えた。

回避する。

風を束ねた翼を飛ばたかせて、この急接近する箒星の軌道から颯爽と離脱する。そして、あの赤い弓兵に窒素爆槍ボンバランスの群を叩き込もうとした瞬間だった。

「カラド・ボルグ
偽・螺旋剣！」

「なっ………！」

爆散。

大気は掻き乱され、窒素爆槍は霧散する。

カラドボルグの破片が皮膚を劈くつんざ。わたしは血を流しながら、何の防御もなく地面に打ち付けられた。

刀を背負い戦場を往く、あの男がいなければ。

☆ー☆ー☆

ズキリと腕が痛んだ。

大腿部や背中にも、燃えているようなヒリヒリとした冷たいモノが走る。

しかし、それは他でもない生の証拠である。

このどうしようもない痛みは、わたしを現世に覚醒させるための

処方箋なのだ。しかと眼を見開く。

「ここは、病院………？」

シルクのように白い、天井と壁に、わたし。

その中間には、最新技術の粋を集めたような医療機器が、ズラリと整列されている。

どれだけ怪我を負ったのだろうか、わたしの皮膚は包帯だらけで、端から見ればミイラと勘違いされそうな病人ぶりだっ

「——で、来週には退院となるね。くれぐれも気を抜かず、安静でいるように」

と、カエル顔の医者が忠告した。

ベッドに倒れこむ。迷宮攻略は、しばらくお預けのようだ。仕方がない。いまはコンディションの調整に努めよう——、いや、わたしは、何かを、誰かを、忘れてやしないか？

わたしは迷宮で死んでいたはずだった。

その窮地を救ったヒトは誰だ？

記憶を探る。

意識が消灯する直前のことだ。わたしは、あのヒトに彼に面影を見ていた。それはなぜか？

立ち姿だ。

ただ一振りの刀で味方を庇う、あの立ち姿こそが彼と似ていたのだ。

けれども、どうしても思い出せない。あのヒトの輪郭も顔も鞆の意匠さえも、忘却の霧に霞んでいる。

「何か。何か。何か取っ掛かりはないの？」

時間ならある。

長い休息の間に思い出すのも手の一つだが、わたしにはなんとなく、寝たら、もう戻れないという確信があった。

「——あ。思えば、わたし、どうして迷宮からここに來れたんだろう。ずっと気を失っていたんだから、誰かがここまで運んでこなきやいけない。ってことは、たぶんあのヒトはカエル医者に会ってる

はず！」

カエル医者に訊けば、あのヒトがどんな人か詳しいことが分かるはずだ。最低限は外見だけでも教えてもらおう。

……………そして、三時間が経過し。

「私を運んできたヒトは誰なの、だって？」

ああ、おそらくは銀と黒が入り交じった髪をした十代後半の男だったはずだよ。赤い眼と背中の刀が特徴的だったね。それと、彼からは君への手紙を受け取っている。自分のことを訊いてきたら渡してくれとの要請だったから、ずっと渡さなかつたがね。見てみるといい」

カエル医者は、あのヒトからの手紙が入っているであろう茶封筒を掛け布団に置くと立ち去っていった。

訊いた甲斐があつた。

早速、のりで閉じられた口を開いて、その封筒の中身を引っ張り出す。

文字はボールペンによつて書かれていた。

「拝啓、加地ハベモ様。いきなり本題になつてすまないが、第25層の攻略は大気操作を保有しているキミのほうに向いている。偽・螺旋剣さえ撃たせなければ勝てるはずだ。逆に、オレとあいつは相性が悪い。オレは超接近戦でしかあいつに勝ち目はないからだ。そこで提案だが、二人であいつを倒さないか？ どちらかが陽動になつて戦えば、勝てる。一週間後だ。一週間後の正午に休憩室に集合して、あいつを倒そう。衛宮生継より」

おおよそんな内容だつた。

ところどころ知らない言葉がある。偽・螺旋剣とか休憩室とか。専門用語はやめてほしい。休憩室と言つたつて、学園都市にはそんなの山ほどあるのだ。どこの休憩室か書いてくれないと分からない。

それに、衛宮生継つて誰だ。彼とはかけ離れた、初めて聞く名前だ。いや、1文字は同じだけれど。

困つた。

集合場所が判らないから二人で戦えないし、あの人間よりもわた

が、それで攻撃を緩めるつもりはない。

いや、令呪のような強制力が働いてるため、できないと言うのが正しいか。

干将莫耶。お互いに引かれあう夫婦剣を投擲し、急接近しようとした少女の動きを牽制する。これまでの戦闘パターンから判断するに、あの少女は随分な慎重派だ。とても肉を切らせて骨を断つような戦い方ができるタイプではない。まずは遠距離からの攻撃で徐々に相手を疲弊させてから、機を見計らって一気呵成に畳み掛けるタイプだ。無限の剣製を使うまでもない。無尽蔵の体力を持つサーヴァントにとって、その戦法は格好の餌食なのだから。

「なに――！」

しかし、その驕りが、油断を生んだ。

少女は大気を数度蹴り、縮地にすら届く高速移動を実現させたのだ。目前に接近されたアーチャーの手には、投影段階にあつて使えない双剣のみ。顔面を狙う少女のストリートを受け止める手段はなかった。

「――」

ついに捉える。

空素装甲に覆われた少女の拳は鉄壁をも穿つ。

『私』が勝利を確信した、そのときだった。

「ふむ、なかなかやるな。しかし残念ながら、霊体化した私に神秘を纏わない攻撃は効かない。つまり、単純な物理攻撃では私を倒せないということだ！」

アーチャーは霊体となることで回避する。

加地ハベモの額に汗が垂れる。このような規格外に対して、彼女

は戦う手段を持たない。

加地ハベモの拳はアーチャーをすり抜けて、地面に巨人の足跡ほどの凹凸を作る。すると、アーチャーはカウンター攻撃にと夫婦剣を再度投影して、隙だらけの加地ハベモに斬りかかる。そしてさらに、先ほどアーチャーが上空に投げた双剣が引かれ合うようになると交差しながら加地ハベモの首に戻ってくることで、加地ハベモが四方を短剣に囲われたときだった。

「くっ、ギリギリアウト、か。まったく、だから一緒に協力して倒そうって……………！」

縮地で一気にアーチャーとの間合いを縮め、二人の攻防を視界に納めていたときには既に抜刀していた和服姿の男は、十数本もの鋼糸ワイヤーを巧みに操って、加地ハベモにギロチンのように落ちてくる干将莫耶の軌道を逸らして処理するも、アーチャーの斬撃を止めるには到らない。男の長刀は届かなかった。

打って変わって、アーチャーの夫婦剣は加地ハベモの首に届く。もし、少女を囲む薄緑色の壁がなかったらの話だが。

「ぬう——！」

アーチャーの左右からの同時袈裟斬りを、空素装甲が弾きかえず。大気さえ乱れなければ、加地ハベモの優位は動かない。よって、アーチャーの次に取るべき行動は一つに絞られる。

「——ブローケン・ファンタズム壊れた幻想！」

剣を爆発させる。

手離したのと地に落ちたのと。合計二組の夫婦剣を爆発させてから、いったん後ろに跳躍。空素の守りを完膚なきまでに崩してから、アーチャーは三度目となる夫婦剣の投影をし、加地ハベモがいる

黒煙に突入する。

しかし、それを黙って見過ごす男ではなかった。

猛烈な爆風の中にある戦場において、男は、加地ハベモに再度斬りかからんとするアーチャーを察知する。肩に掛けた刀で十数本の鋼糸を手繰り寄せ、複数の術式を即座に完成させる。呪詛。炎弾。氷槍。

アーチャーは、それら全ての術を夫婦剣と剣製を用いて防いだが、これは第八位の大気操作が本格的に火を吹くには十分な時間だった。

「パターン1、3、4、6を並列起動」

「くっ……………」

窒素装甲。窒素爆槍。加圧空間。大気砲弾。

己の矛と鎧を作り直し、アーチャーの半径五メートル圏内の気圧を最大限にして、さらに周辺の大気を圧縮することで致死性のある砲弾を造る。

反撃をさせない構え。

数多の大気製の武具が、あまりの気圧で身動き一つ取れないアーチャーに飛んでいく。

決着はついた。加地ハベモあたりの誰かが、そう確信して肩を抜いた、そのとき。

「いや、まだわからんぞ————
S o a s I b y u n l i m i t e d b l a d e w o r k s」

炎が世界を塗り替える。

奥行きが500メートルの鍾乳洞は、無数の剣が突き刺さる広漠とした赤土の荒野に。高さを50メートルに制限していた天井はなくなり、巨大な歯車が宙に浮かぶ赤銅色の空に。極度の気圧も、数多の大気製武具も、世界の上書きによって全て消えていく。アーチャー

の宝具、無限の剣製によって、戦況は仕切り直された。

アーチャーは二人を一気に始末するべく、投影した剣を上空から際限なく降らせて《破れた幻想》で爆破させる。連続一点集中の波状爆撃だ。

「さすが、だなアーチャー。加地ハベモでは勝てそうにない。なら、オレが————一歩、音越え」

しかし、男には効果がなかった。

数百の剣が豪雨となって降ろうと、男は縮地でアーチャーの側まで飛ばばよいのだから。アーチャーも自身に剣を降らせようとは思うまい。男は刹那のうちに間合いを詰めて、平突きでアーチャーの急所を狙う。

むろん、それに対して何の対策をしないほどアーチャーは慢心していない。夫婦剣を交差させて心臓部を守らんとする。

——そして、交錯。

アーチャーの夫婦剣と男の長刀。

男の狙いはサーヴァントの核に当たる箇所であり、ここを潰されるとサーヴァントは死ぬ。ゆえにアーチャーは、絶対に突きを迎撃する必要がある。

「ハア……………」

火花が散った。

ぐいと突きを押し通そうとする男に対して、アーチャーは夫婦剣を重ねて防御の構えを取り続ける。

互いの力は拮抗していた。このままでは決着は着きそうにもないようにも見えるが、二人の戦上手はわかっていた。ここから状況が動かなければ、形勢がアーチャーの有利に大きく傾くことを。

だから、1人は拮抗を維持しようと、絶妙な力加減で現状を維持しようとした。

だから、1人は拮抗を打開しようと、己の切り札を切ることを躊躇なく選んだ。

「――二歩、無間」

再度、突く。

一度引いてからの鋭く重い突き。アーチャーは再び守りきるが、確かにバランスが僅かに崩れる。そこを男は見逃さなかった。

「三歩、絶刀――！」

再再度、突いた。

アーチャーも再再度防御の構えを取る。が、これは意味を為さなかった。長刀が夫婦剣をすり抜けてしまったからだ。

刀がアーチャーの心臓部を突き刺す。アーチャーは、夫婦剣のすぐ近くにある男の首を、なぜか取ろうとはしない。嵐の音が止んだ。「やはり、な。どうやら、こちらの世界ではサーヴァントは弱体化しているらしい。それを無制限の魔力供給で補っている、ということか」「そういうことだ。しかし、君の刀は奇妙だな。部分的に実体化し、部分的に霊体化する刀など、私は知らないぞ。鑑定によると――」

「おっと、そこまでだアーチャー。加地ハベモが聞いていないとも限らない――」で、この勝負。オレの勝ちってことでいいんだよね？」

「ああ、むろんそうだとも。ところで、そこにいる負傷者を連れていかいれないかは君の自由だが、もし助けるのならなるべく急いだ方がいい」

「――あいわかった」

男は、怪我で気絶した女を持ち抱えると、転移石で迷宮から脱出しようと呼文を唱える。その直前。

「衛宮生継。……………これは私の独り言だが、率直に言って第50層

と第75層のサーヴァントは難敵ではない。私よりも弱いのだからな。しかし、第95層以上の階のボスは桁の違う強さだ。特に第10層は厄介だぞ。くれぐれも対策を練っておくことだ」

「――転移」

男は答えずに学園都市へと移動した。

これを見送った後、第25層の階層ボスは眼を閉じて消滅した。第25層には戦いの爪痕だけが残っていた。

――なればこそ、ソレは幻だ。

消えたはずのサーヴァントを呑み込む黒い影。

瘴気の塊のようなソレは、きつと幻なのだ。